

蒙談



第 31 号

蒙 談 会 発 行

式年遷宮記念

山口大神宮考

柴田眼治



式年遷宮された

山口大神宮内宮



遷宮後の外宮

かねて造営中であつた山口大神宮の内・外両宮がこの度、檜の素木造りしらきづくで新調され竣工した。平成十二年十月十三日夜に四十年振りの式年遷宮が浄闇の中で厳かに挙行された。この日を迎えるまでの関係者各位のご盡力は大変なものであつたろうと拝察する。県内外から寄せられた多くの善意の成果である。誠に慶賀に堪えない。四百八十年前、大内義興公が勅許を得て伊勢皇太神宮の分霊を勧請して創建し、毛利氏歴代も、その祭祀と式年遷宮を継承した。五年前に内宮が火災で焼失したが、禍を福に転じて平成の式年遷宮が実現

したのである。すなわち、大内文化が二十一世紀の次代へと引き継がれることとなり、その意義は極めて大きい。

さて、前号で皇太神宮内宮秘紋^{やかたものにしき}尾形文錦が創建当時

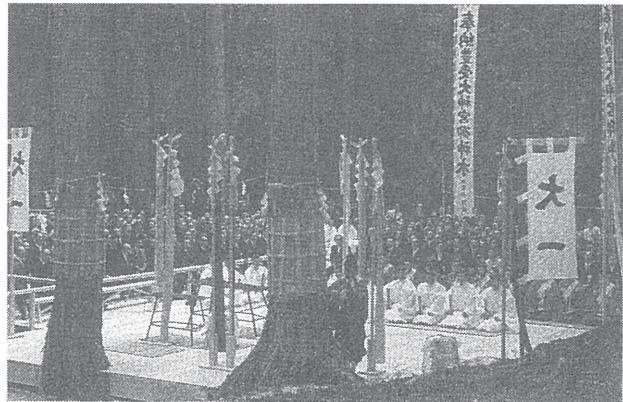


「高嶺両太神宮御鎮座伝記」卷子表装の
伊勢神宮内宮秘紋屋形文（太一の屋形）筆者撮影

に作成された「高嶺両太神宮御鎮座傳記」の巻子の表装に使われており、伊勢神宮と大内氏の北辰祭祀との関係について、その重要性を考察した。前号で紹介した吉野裕子著「易と日本の祭祀」（人文書院）に次の記

載がある。

『例年、六月二十四日は皇太神宮別宮伊雜宮^{いざのみや}の御田



御 杣 始 祭（昭和60年6月3日・長野県上松町にて）
矢野憲一著「伊勢神宮の衣食住」東書選書より

植神事の行われる日である。その際、神田の西側に立てられる大翳^{おおさし}に「太一」の文字が大きく墨書されるが、太一、あるいは太一の字は、ご遷宮の際のご用材にも刻^{みそまつり}され、御杣祭

の幟^{のぼり}にも大書される。

「太一」とは中国の宇宙神の神名である。処もあるに皇室の祖先神を祀るこの社に、何故、異国の神が顔をみせなければならないのだろうか。

伊勢神宮と天武天皇

天武天皇と伊勢神宮の關係は深く、壬申の乱のさ中において朝明郡の川畔から遙拝して戦勝を祈願され、皇祖として格別に手厚く奉斎されていたことは正史の簡潔な記事の中からも十分うかがわれるのである。

天武天皇の伊勢神宮崇敬は当時の国家意識昂揚の結果であるが、一方この国家意識と一見矛盾するかのやうに、中国古代天文学と密接に結びついている古代中国哲学、つまり陰陽五行思想盛行の諸相も、またこの時代に集中してみられるのである。たとえば日本最初の占星台設置、前後の時代に類のない天文学観測の記事等である。記紀編纂の着手はこの天武朝であるが、天武朝↓中国古代天文及び陰陽五行思想↓記紀編纂の筋道は、日本神話の中における中国思想の濃厚な反映を示唆するのである。そのことは夙に飯島忠夫博士によつて次のやうに指摘されている。

「日本書紀には陰陽思想が含まれている。特に神代

の巻において最も著しい。陰陽思想は中国の天文学の理論であつて、天地の成立も皆之によつて説明される。易の哲学もまたこの適用に外ならない。そして五行思想はまたこの陰陽思想の展開したものである。日本の神話説話の初めにある天地開闢、国土生成の段にこの思想が加わっていることは神代説話に中国文化の影響があることを談つていゝものといわねばならぬ。……淮南子には『北斗の神に雌雄あり。雄は左より行り雌は右より行る』と記してあるが、北斗には七星があるから雌雄の神も七組ある。この雌雄はまた陰陽である。帝（太一神）はこの七組の陰陽神を使つて万物を創造させるというのであろう。」

として、神世七代の神を、北斗七星の雌雄の神に対応させておられる。

祭りは神話の再演といわれている。飯島博士によるこの指摘がありながら陰陽五行は迷信として退けられ、日本の祭学をはじめ隣接諸科学の研究方法の中に導入されることがなかったのは、それらの諸学にとつて重



吉田光邦著「星の宗教」 淡交社より

漢代画像石 北斗星君の帝車

(北斗七星は天帝の乗物、輔星を描く)

大な損失だったと思われる。

陰陽五行思想の概要

中国古代天文学では天の北極星を中心とする部分が天の中心と考えられ、ここを中宮とよんだ。中宮は北極星およびその周囲にある星座から成立する。北極星の神靈化が最高の天神「太一」であって、その太一の居所は北極中枢附近のもっとも明るい星とされている。その近くに太子・後の星があり、この天帝一家の二団を紫微宮と名づけている。

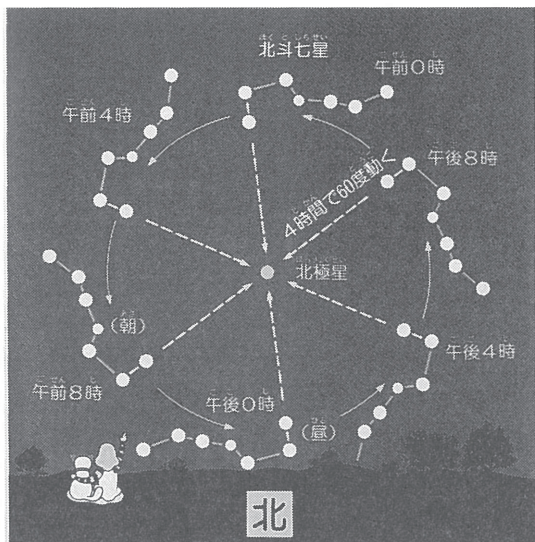
太子に接して北斗七星があり、北極星および北斗七星を総称して北辰（北の星の意）といっている。（北辰は北極星だけを指すこともある。）北極星は動かない星である。この動かぬ星の北極星、つまり太一に対し、その周りを一年の周期で廻る北斗七星は、当然動く星として意識され、この動かぬ星と動く星の関係は、天帝とその乗車として捉えられることになる。

『史記』天官書第五には、

「斗を帝車となし、中央に運り、四郷を臨制す。」

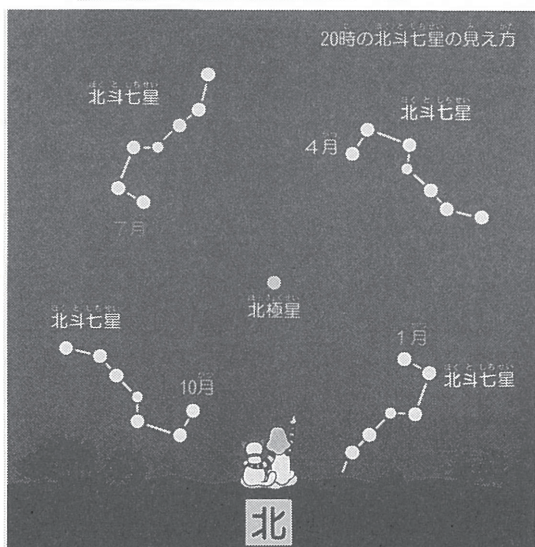
と述べられている。北斗は太一の乗物で、天帝はこれを御して宇宙に乗り出し、四方上下を治めるという

事実、北斗七星は北極星を中心に一時間に十五度ずつ動き、一昼夜でその廻りを一回転し、一年でその柄



▲北斗の星時計 北斗七星は、日周運動で北極星のまわり(くわしくは天の北極)を一日一回転しています。つまり、1時間に15度動いて、24時間で360度ひとまわりするわけです。北斗七星のこの動きを時計の針に見たてると、その回転した角度でおよその時間の経過を知ることができるわけです。ただし、この時計の文字盤は24時間きざみ、時計だけで分針はなく、逆まわりにまわっています。

藤井旭著「チロの星空カレンダー」より
北辰・北斗によって四季と時刻を知ることができる。



▲北斗の星ごよみ 地球は一日一回転する自転をしながら、太陽のまわりを一年がかりでめぐる公転をしています。このため、北斗の星時計がおなじ位置にもどるのは、じつは毎日4分ずつ早くなってくるのです。つまり、1か月に2時間のわりでおなじ位置に見るのが早まって、もし、おなじ時刻に北の空を見あげていると、北斗七星の位置は季節によって上図のように変わってくるのがわかります。

杓の柄は十二方位を指す。したがって北斗は絶対に止まらない天の大時計として『天官書』には陰陽、つまり夏冬を分け、四季の推移と二十四節気を調整し、五行の円滑な輪廻を促すものとしている。この北斗の人類になす最大の貢献は、農耕の基準を示し、民生の安

藤井旭著「チロの星空カレンダー」より

本を保証することであって農事を基本とする生活暦が北斗の運行を基につくられていたのである。

天帝「太一」に対する北斗の役柄は車だけではなく、その強力な輔弼として太一ともっとも緊密な間柄となっている。太一は前述のように北極星の神靈化であるが、同時に太一は中国哲学における「太極」の神格化でも



伊勢別宮伊雑宮のお田植竹取り神事に
登場する「太一」の団扇竹（大翳）

伊勢神宮崇敬会「神宮」より

ある。太極とは何か。それは中国の宇宙創成説話に關わってくる。

『淮南子』によると、原初、宇宙は未分化の混沌であつたが、その中から清明の陽気は天となり、重濁の陰気は下降して地となつたと説く。陰陽二気はもと同根故に互いに交感交合し、地上においては木火土金水の五原素を生じ、この五原素の輪廻・作用が五行であるという。

陰陽五行説の理解には、この陰陽二元を派生する最初の存在、一の数によつて象徴される太極の把握がもっとも重要である。冒頭にのべたように北天の北極星を宇宙の大元とみて、それを神格化して太一としているが、この太一が同じく原初、宇宙の唯一絶対の存在である「混沌」または「太極」の神格化なのである。

北極星Ⅱ「太一」、太極Ⅱ「太一」ということは、この間の事情をよく物語っているとい

えよう。』以上、吉野裕子氏。

この太一について矢野憲一著「伊勢神宮の衣食住」(東書選書)では次の通り述べておられる。

『太一のシンボルマーク』

式年遷宮にはたくさんの宮大工や作業員が従事する。小工が九万八千五百人、萱工が一万六千八百人、銅工が五千六百人、作業員が十一万四千人、合わせて約十年間に従事する延べ人員は二十四万四千五百人というからすごい。

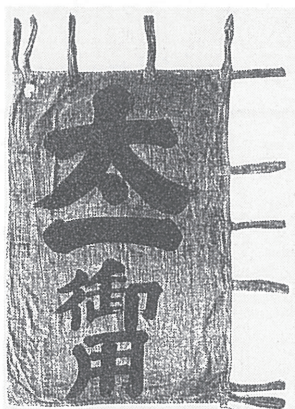
その中の神宮式年造営庁造営課に所属する人の作業服は一年を通じて白装束で、白い帽子やヘルメットの正面には「太一」という徽章がついている。昔は造営に携る人々の法被や檜笠などにも太一の印がつき、「太一」は神宮の造営のシンボルマークである。

先にも記したが神饌や遷宮用材を運搬する際の旗や伊雑宮の御田植神事の大騾にも「太一」を記し、「太一」や「太一」は造営の専用ではなく広く神宮のマー

クと昔はされていた。

なぜ太一がシンボルマークだろうか。

太一は明治四年の神宮改正以前は主として「太一」と記されていた。太神宮の太も明治五年に太政官布達により大と改められたのである。



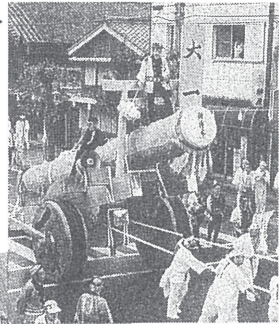
神宮御用の幟

中国の古い文献では大も太も区別なく用いられていたが、大は人の正面形に象り、オオキイ、

サカン、スグレル。太はオオキイ、フトイで、物のはじめ、おおもと、高い尊称にいずれも用いられ、大の上に頭部を示す円を加えて天という字ができ、太の点を上に付けても天となり、太一も天の意に通じる。

古代中国には太一神というのがあり、この神は天地すべての至高神とされていた。そして「太一陰陽五行

お木曳車 ▶



五十鈴川を川曳き
▼ (古市町)



矢野憲一著「伊勢神宮の衣食住」

東書選書より

れはわが国の天照大神と同じだと感じ、
太一を神宮の印としたのであろう。

江戸時代の百科辞典に寺島良安著『和
漢三才図会』百五巻があるが、これは中
国の『三才図会』をモデルにしたもので、
三才とは天・地・人をあらわし、もって
宇宙森羅万象一切を含む意としている。
その中でも天を一切の代表とした。

荷物を送るとき「天地無用」という札
を付ける。あれは「この荷は上下ひく
り返すと困ります」という注意書きであ

思想」が生じるが、思想として成立する以前に宗教的
な儀礼として古くから、この天神は祀られていたであ
ろう。

『莊子』には万有を包含する大道、天地創造の混沌
たる元気をいうとあり、『礼記』には太一は天地の本
なりとある。また天之尊神、北極星・天帝とされ、お
そらく奈良時代にこの中国思想が入ってきたとき、こ

るが、以前から私はそれが不思議だった。「心配無用」
と同じく天地に用がないというのだから、ひっくり返
してもよいことではと納得がいけない気がする
がこれは余談である。貴い上の部分を天と表現するの
は天子さまを例にとるまでもなく、天こそ尊貴無比と
する思想が古くからあった。

天照大御神は天神の元首で尊いこと比がなく、この

大神の御用だから大昔から神宮への奉納品は「太一御用」の幟を立て、天下に一つしかない貴重なものという意で、御料木の木口などに太一の極印を押したり、明治二十二年の第五十七回式年遷宮からは正式に造営のシンボルマークと制定されたのである。

造営庁職員は「天下に一つの大事な仕事をさせていたでいています」とヘルメットのマークを誇りにし、安全第一、毎朝作業にかかる前に全員が湯で身を清め朝拝し、精進潔斎して今日も作業に励んでいる。」以上、矢野憲一氏。

外宮秘紋刺車文（小車文）について

さて桜井勝之進著「伊勢の大神の宮」（堀書店）には次の様に記載されている。

『それらの中で特に目をひくのは、度会宮には皇大神宮の屋形文の錦の御被みかすりまに対応するものとして刺車錦さしぐるまの御被があることである。

小車おぐるまの錦手向くる神路山まためぐり

逢ふ年はきにけり（続古今和歌集）

君が代に又めぐりあふ小車の

にしきぞ神の手向なりける

（新千載和歌集）

ここに小車の錦とあるのは刺車文の錦をさすもので、都にもその名がきこえ、お装束の代表のようにも考えられていたことを示している。神宮式年造営庁の村瀬

美樹技監は「形態

を象徴化し、モノ

クロームで並列せ

しめるというアイ

ディアを、黄地に

黒で対比させた、

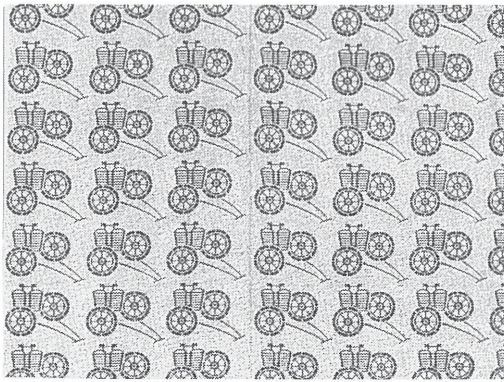
単純で、しかも力

強い表現効果は、

実に心憎いばかり

で、これが古い伝

統をもつものかと



伊勢神宮外宮刺車錦御被（部分）

疑う程に、なおも現代に通じる感覚がある」と述べている。外宮のご神座にお乗物の文様を用いたのは特別の考えがあつたのであろうか。』とあり、吉野裕子博士の「刺車（小車）文は北斗七星をデザインしたもので即ち北斗は帝車」との新説に符号するのである。

この刺車文（小車文）が山口大神宮にも存在していないかと探していたところ「防長風土注進案」（第二十上宇野令之一）に次の記載があつた。

『 豊受大神宮正殿御装束之事

一 御壁代生繩單帳

一條

長五尺四寸十八幅都合拾丈八尺

一 御細布巾

一條

一 正殿御扉之帳

一條

鵲鴿錦五尺四寸四幅 縫立四尺四寸

一 御髮阿氏

一條

風帟二同錦垂糸

五色十二筋結上ノ寸
五尺三寸

總角三 淺緑縫目
別着之

一 御枕 納柳筥

一基

一生繩袷御衣闕腋

二 領

一 御沓 居柳臺

一兩

以七丈縫之都合十四丈

一 御櫛筥 納柳筥納櫛八枚黄楊

一合

一小車錦御衣

裏綾緋文綾也
御家御紋也

一 領

一 紫御扇 納白筥

一柄

以五尺八尺縫之

一 御疊

四枚

一 正殿御被 小車錦裏綾文同

一條

長五丈二幅

一 御船代内之御衾

一條

一 御裳

一條

一 御帶

一條

一 御意須比料絹

一條

一 御比禮料絹

一條

一 御袜

一條

一 御細布巾

一條

一 御襪

一両

一 御髮阿氏

一條

一 御髻結

五條

一 御枕 納柳筥

一基

一 御沓 居柳臺

一兩

一 御櫛筥 納柳筥納櫛八枚黄楊

一合

一 紫御扇 納白筥

一柄

一 御疊

四枚

（注以下略）

一 菅御翳

一 柄

一 御木絡練

二 基

己上豊受皇大神宮御装束

一 御脇息

一 脚

同神財 二十一種

一 御鎌

一 柄

一 御弓

一 張

一 御農具

一 御胡籙

一 合

右各尺寸同皇大神宮鉾用眞鍮、柄以檜作之

一 御征矢

二 雙有臺

己上豊受皇大神宮御神寶

一 御漆御靱

一 腰

右周防國高嶺皇大神宮御装束并神寶雜物二十一年一

一 御靱

一 枚

度平安城縫部工部等依式奉造者

一 御鉾

一 竿

文政二年十一月

一 御楯

一 枚

大司從五位上行上野介橘朝臣歲輔

一 金銅造御太刀

一 柄

權司從五位下守播磨守橘朝臣歲明

一 御飾橫刀

一 柄

職掌人等

一 御鏡篲

一 合

一 白馬形

一 匹

一 御玉佩篲

一 合

廿一年一度御遷宮神寶御装束等の式目左の如し

一 御胡牀

一 具

一 高嶺皇大神宮御装束并神寶等式目

一 條

一 御高機

一 具

一 御壁代生繩單帳

一 條

一 御簾

二 枚

長五尺三寸十八幅都合拾丈八尺

一 條

一 正殿御扉之帳

鶴鶴錦長五尺四寸横四幅 縫立四尺四寸

風帛二同錦垂系 五色十二筋 縫上ノ寸五尺三寸 総角三 淺緑縫目 別著之

一生絶袷御衣 闕衣

二領

絹以七丈縫之都合拾四丈

一屋形文錦御衣

納綿裏地緋文綾 御家御紋類織

一領

以五丈八尺縫之

一正殿御被屋形文錦

一條

長五尺三幅也、裏綾同前

一御船代丙之御衾

一條

同御扉錦帳長二尺五寸二幅、裏綾同前

以下略』

と記してあった。これは文政年間で毛利氏時代の記録である。伊勢神宮の略式版で大内氏以来のものと考えられる。

さて山口県立大学文学部教授熊本守雄先生からは、次の記録があることをご教示頂いた。

『皇太神宮儀式帳（群書類従本）

一、新宮遷奉御装束用物事

出座御床装束物七十二種

御床敷細布帳一條 長一丈。弘四幅（中略）

屋形錦御被一條 長九尺。弘四幅。

小文紫御衣二具。

長各三尺五寸。納綿一屯。白裏細子。色衣色同。

（後略）

内宮御神宝記（続群書類従）

樋代料御装束

（前略）

屋形文錦御被臺修。 長一丈。弘五幅。緋絹。裡納綿二拾屯。（後略）

造伊勢二所太神宮宝基本記（続群書類従）

（前略）

御船代。御樋代。神宝藏。神代制作形器也。

太神宮屋形文錦御衣者。皇天常住之本居義也。

豊受宮小車錦御衣者。乗宝車廻四天下。度萬類

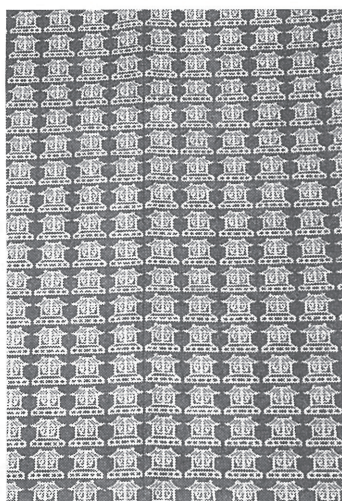
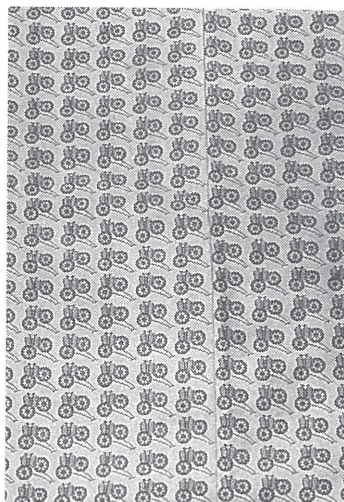
由也。

浄瑠璃（近松門左衛門作）

日本振袖始・二

伊勢神宮内宮御被
秘紋屋形文錦

筆者撮影



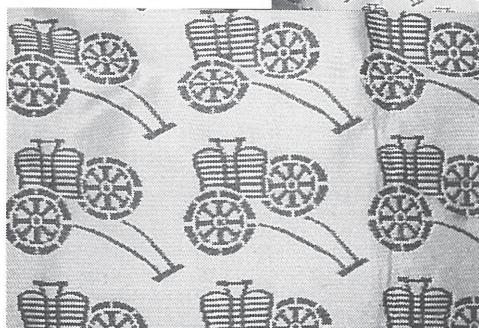
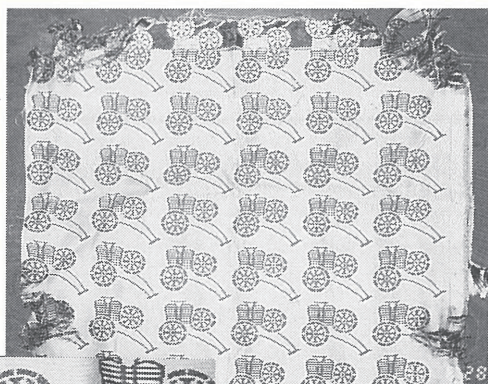
伊勢神宮外宮御被
秘紋刺車（小車）文錦

「天の逆矛屋形紋の錦にうやうやしく、
其身は床几に悠々と……………」

※屋形紋：家の形状を图案として表わした

山口大神宮外宮秘紋
刺車文（小車文）錦
御衣の断片

筆者撮影

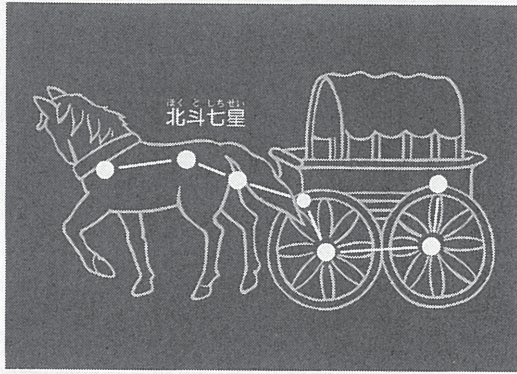


同上
刺車文（小車文）
拡大写真

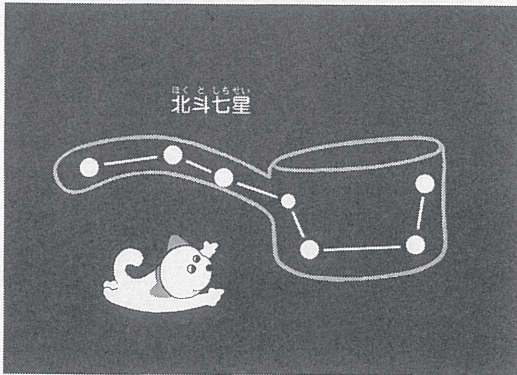
模様。また紋所。屋形模様。』
そこで松田良治宮司に小車文錦が現在残っていない

かと探索をお願いしていたところ、六月二十八日に「小車文錦の端切れが見つかりました。」との連絡があった。喜び勇んで社務所へ参上した。神宮神紋唐花文が螺鈿された黒漆の小篋から鮮やかな小車文（刺車文）錦の断片が取り出された。宮司は「豊受大神の御装束の袖

の一部ではないでしょうか。」とのことであった。防長風土注進案記録の「小車錦御衣」の一部に当ると思われる。誠に優雅な文様である。前号で国学者でもある近藤清石先生が小車文と屋形文錦を詠み込んだ和歌を紹介したが正に黄葉や紅葉の様なあざやかな錦である。



▶チャールズ王の馬車 中世ヨーロッパでは、このほかアーサー王の車などともよばれました。



▶ソース・パン（フランス） 柄のついたふたつき
きの深なべで、ひしゃくの見かたにしています。

藤井旭著「チロの星空カレンダー 北斗の七つ星」より

藤井旭著「チロの星空カレンダー」（ポプラ社）にも前掲の帝車の画像が載せてあるが、北斗七星について次の様に分かりやすく記述してある。

『北斗七星の姿（世界）』

大きなひしゃく天をめぐる車

大びしゃくは天の車

みなさんには、北斗七星のひしゃくは、熊の姿に見えるより、むしろ車の形と見たほうがわかりやすい気がしませんか。実際、これを天をめぐる車と見ていた人びとのほうが、ずっと多かったのです。

七つ星とひしゃく星

くらしの中にあつた北斗七星

北斗七星の姿（日本）

皇帝の北斗星君が乗る車とされていたといわれます。

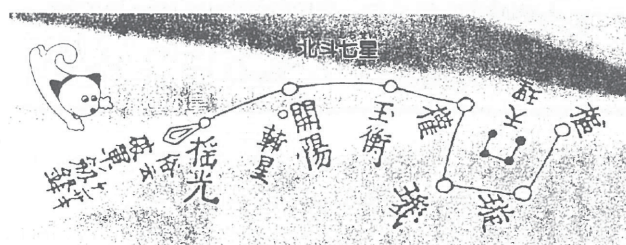


▲船星の形 北斗七星のうち五つの星で船の形と見ますが、のこり二つの星を船かざりと見てもよいでしょう。小犬は藤井旭氏の白河天体観測所の天文台長「チロ」で宇宙犬。

大昔のバビロニアで、すでに大きな荷車と見られ、エジプトでは大神オシリスの車、北欧では大神オーディンの車、イギリスではチャールズ王の車などとしていました。そして、中国でも「北斗は帝車なり」といって、

船星

春から初夏のころ、宵の北の空高く横たわる北斗七



▲「和漢三才図会」（江戸時代）にえがかれた北斗七星

日本の人びとも、北斗七星を見あげ、自分たちのごく身近にあるさまざまな物の形に見たてていました。まず、「七つ星」です。北斗七星は、七つの星が輝いているのですから、これは、まあ、そのものずばりのなにと素朴で、素直な呼び名といえます。

つぎは「ひしゃく星」です。中国の呼び名の北斗と同じ意味の呼び名ですが、中国の斗（^{ます}杓）がいくぶん

立派なのに比べ、日本名のほうは、台所などどこでも使われる、ごく普通のありふれたひしゃくのことです。

星のうち、頭の二つの星を除けば、ちょうど和船のような形に見えるところから、この名があります。

また、遠くマーシャル群島でも、北斗星は神の船と見ていたといわれます。

かじ星

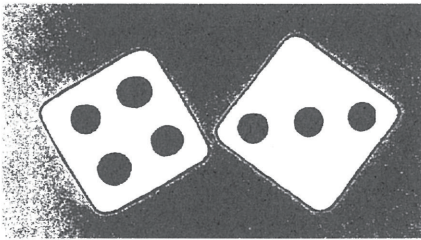
夏から秋にかけての宵、北斗七星は北西の空へさかさまにたれさがったようにかかります。

その形が船をあやつる舵かじの形にそっくりだということで、上の図のように見て、「かじ星」と呼ばれていました。

破軍の星

昔、中国では、北斗七星の柄のさきの星を「破軍星はぐんせい」と呼び、この星に向かって軍を進めると、かならず戦いにやぶれると、いいつたえられてしました。

北斗七星が北の空をめぐるにつれ、柄は十二支の方向をつぎつぎにさし、その先には金神こんじんがいるため、その方向に向かって戦ったり、論争したり、かけごとをすれば必ず破れ、勝負事にはよくないとされていたの



▲四三の星 サイコロの四と三の目が北斗七星そっくりに見えます。

です。その名が、そのまま日本につたわり、柄の先の星は「破軍の星」とか「剣さき星」「剣星」などと呼ばれ、図のように剣が描かれていました。

四三の星

「すまる、かせぼし入る処はあるが、わしら、しそぼし入る処ない」

これは四国の石鎚山のあたりで歌われた古い民謡の一節です。

「すまる」とはスバルのことで、「かせぼし」はオリオン座の三つ星のことです。そして、「しそぼし」と言うのは北斗七星のことです。つまり、この歌は「スバルやオリオン座の三つ星などは、毎晩、地平線にしずんでひと休みできるのに、北斗七星だけはいつも北の空を巡めぐっ

て休むひまもなく、わしらと同じさ」と、自分たちの働きもののぶりを、北斗七星にたとえていつているわけです。では、なぜ、北斗七星が「しそぼし」なのでしょう。うか。

じつは、「しそぼし」は「四三の星」のことで、北斗七星のうちの柄ますの部分の四つの星と、柄の部分の三つの星をわけてよんだ呼び名なのです。

これは、二つのサイコロを使って双六遊すごろくびやかけごとをするとき、ふったサイコロの目が四と三と出ることがあり、その名をつくる形が、北斗七星の形とそっくりというので、そうよばれることになったものといわれます。

北斗七星の形が、二つのサイコロの目、四と三にそっくりとは、なんともユニークな見方ですね。

四三の星の名は平安時代以前から、すでにあったといわれ、随分ずいぶん古い日本の星の呼び名だとわかります。』以上、藤井旭氏。

洋の東西を問わず北斗七星は乗物をあらわす星座と

見られていたのが驚きで大変に面白い。

余談であるが、藤井旭氏は山口市駅通りの出身。世界的なアマチュア天体写真家である。福島県白河に天体観測所を自力で造り、オーストラリアにも天文台を建てるなど凄いパワーの持ち主である。その著書は書店の天文関係の書棚にズラリと並び、全国の星好きな少年少女や大人の憧れのスターである。また山口高校の天文部も仲間と共に創設した。因みに筆者の同級生であり、今回の資料として紹介させて頂いた。最新刊としては「宇宙大全」の大冊がある。正に星博士といえよう。

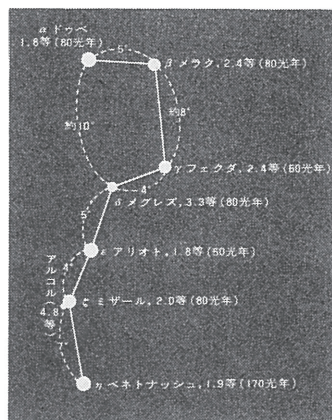
北斗七星の特長と信仰

さて先の漢代の帝車の画に六番目の星の上に小さい星があるが、ミザールとアルコルの二つの番星つがいほしである。藤井旭氏の前述の著書には『アルコルはサイダクとい

い「目だめしの星」という意味で、古代アラビアでは

『(青蛙房) によると、
北斗七星の崇拜』

て合格し、採用された』そうだ。一方わが国ではアル
コルは輔星、添え星と呼ばれ、密教の北斗曼荼羅や妙
見菩薩像にも画かれている。(下図) 昔の人は眼がよ
かっただけでなく、実によく星を観測していたことが
分かる。今でも双眼鏡でみると確実に分かる。夜空を
仰いで、北斗七星と帝車や他の馬車さらに小車文をか
さねてみるのも壮大なロマンである。もう少し北斗に
ついて考察してみると、金指正三著「星占い星祭り」



藤井旭著「星座ガイドブック」
誠文堂新光社

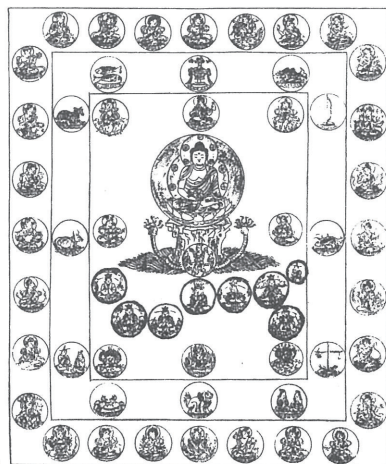
視力検査に
使われた。
肉眼でこの
ミザールと
アルコルが
見分けるこ
とができれ
ば兵士とし



妙見菩薩(『十巻抄』)

錦織亮介著
「天部の仏像事典」
東京美術選書より
中央の一字金輪仏頂の下の
北斗七星に輔星が配してある。▶

◀ 錦織亮介著「天部の仏像事典」
東京美術選書より
左手に持った蓮華台に北斗七星を
載せている。輔星も描かれている。



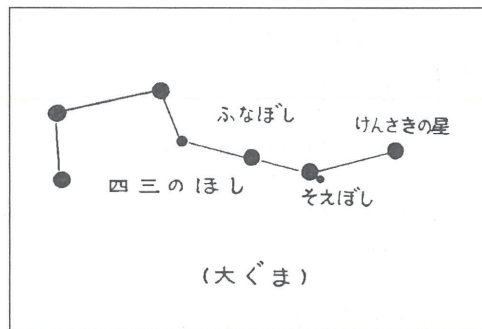
北斗曼荼羅(『十巻抄』)

北斗七星は『史記』天官書に、天帝の車であり、中央に運行し、四方にのぞんで制し治め、陰陽を分かち四時をたて、五行の氣をひとしくし、季節を移し、もろもろの政法を定めることを掌るものである、と説かれて以来、帝星と呼ばれ、四季から陰陽五行などをつかさどる天の中心星であると考えられた。しかも、七星の数は、日月五星の七と同数である。陰陽五行説によれば、全宇宙の精は日月五星に集中し、宇宙を代表するものであるという。その七と同じ数の七星が、天の北極を中心として大空を廻っているところから、天の中心であると同時に、あらゆる権威の中心であると考えられた。

この北斗七星に対する思想は、わが国にも伝わり、『心日宸記』の延慶四年（一二三二）正月二十一日の条に、「北斗七星は七政の枢機、万物の精命なり。神道の智を以て、世の事をさいわいとし、自在の威を以て人の寿算（寿命）を定む。」とあるように、上は国家から下は個人に至るすべてを支配する星であると

野尻抱影著「星の神話・傳説集成」

恒星社より

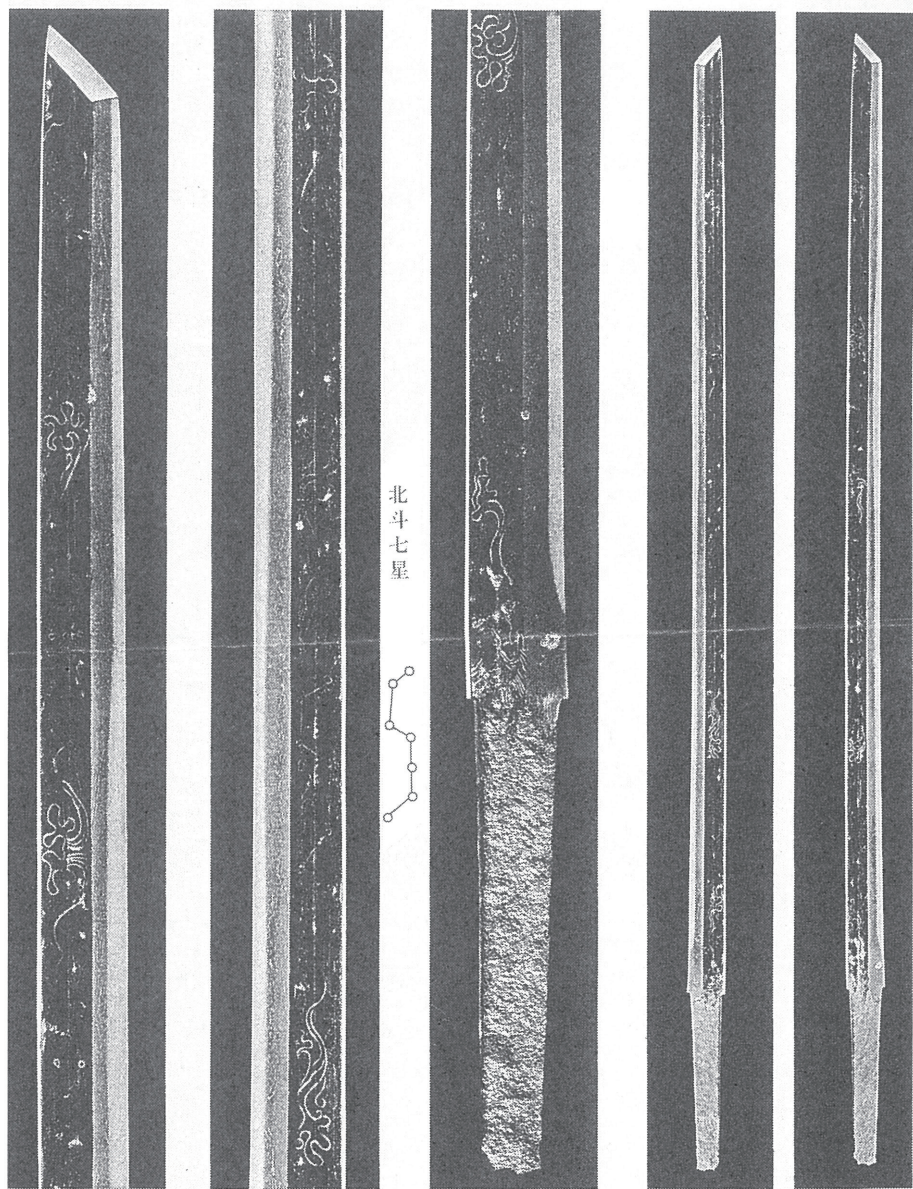


ふな星・そえ星・けんさきの星

崇拜するようになった。それではいつ頃から、北斗七星を信仰の対象とするようになったかというところ、文献の上では、あまり古くからは現れないが、金石文の上では奈良朝以前に属するようである。

その一つは、大阪の四天王寺の所蔵す

る国宝の丙子椒林剣である。これは、長さ六十六センチの直刀で、丙子椒林と金で象嵌してある。吉田光邦氏説によると、丙子は干支であるが、椒は中国では古来靈木とし、『春秋』運斗枢は玉衡星が地上に降下し、散じて生じたものとしている。玉衡星とは、璇璣玉衡の玉衡とすれば、北斗七星のことである。また、正月



七星剣 西天王寺 (大阪)

Chokutō blade known as Shichisei Ken

Shitennō-ji, Osaka

北斗七星剣

文化庁監修 国宝「8 工芸 Ⅲ」より

一日、拝賀のときに椒を盛った盤をすすめ、椒酒を飲んだことが、『礼記』の月令に見えるが、このように椒はきわめて神秘的な性格をもった植物であるとされたから、椒林の二文字には天界につながる咒的な意味がふくまれているようである。

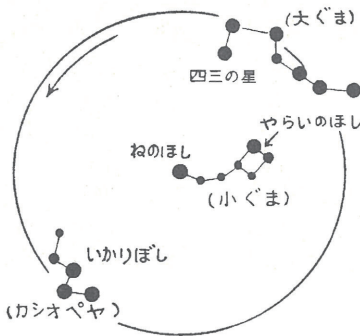
もう一つの国宝の七星剣は、長さ六十三センチの直刀で、刀身に二筋の樋があり、樋の上に七星と雲形、また、はばき元に竜頭がそれぞれ金象嵌してある。この七星は、北斗七星に通ずる。

この両刀は、寺伝によると、聖徳太子の御剣と伝え、が、神剣であり、呪術的な用途に供されたものであろう。両種とも七星を象徴していることは、北斗七星のもつ国家鎮護の性格を思い合わせるものである、としていられる（星の宗教）。

また、正倉院御物の剣に、刀身に七星を線をつないだ北斗七星を彫った七星文様剣がある。これらはいずれも北斗信仰をあらわすものであり、奈良朝以前から、こうした形でわが国に流入したようである。

『密教においては北斗七星は『北斗七星護摩秘要儀軌』に、日月五星の精であり、七曜を総括し、八方に照臨し、上は天神をかがやかし、下は人間を直し、善惡をつかさどる。そして禍福を分ち、群星の朝宗するところ、万靈の仰ぐところであると崇拜し、これを礼拝供養すれば、長寿貴福を授けてくれるものと信仰した。その功德をのべた秘密教經典には、右のほかに、北斗七星延命經一卷・北斗七星護摩法一卷・北斗七星念誦儀軌一卷・七星

如意輪秘密要經一卷などがある。その説くところは、善惡は宿業（前世の報い）の感ずるところであり、禍福は星宿のつかさどるものであるか



四三の星・ねのほし・いかり星
野尻抱影著「星の神話・傳説集成」

恒星社より

ら、祈念・供養すれば必ず感応をえられる。すべて人力で運否を定めることはできない。北斗七星は一洲に限って護持する故、上は王侯相将から下は田夫野人に至るまで、これを仰ぎ祈れば、みずから禍を転じて福とし、寿命を延ばすことができる。もし国王にして宮廷に曼荼羅を作り、護摩供養すれば、北斗は歓喜してたすけまもり、宮廷は榮え、穀物は豊かにみのり、国土は安寧なることを得るであろう。もし人心をすまして、清浄寂靜のところに香花・飲食を供えて供養し、神咒を念ずれば、願望は成就し、官位は榮進し、寿命を求むれば、定命よりさらに延ばしてくれるという。その供養は『諸尊要抄』の北斗道場觀、『七星如意輪秘密要經』などによれば、月の一日から八日までを一期として、浄室を造り、七星火壇を露地に設け、錢燈、洗米、菓子、茶を供えて念ずれば、七星が降臨するという。

北斗七星は、祈念すればこのような功德をほどこしてくれるので崇拜されたが、なканづく、人はその生

れ年および生れた日の干支によって、七星のうちのどの星かに属し、その星によって運命が支配されるという属星、本命星として信ぜられたので、殊更に尊崇された。

北斗七星は、第一星から第七星までを、貪狼星、巨門星、禄存星、文曲星、廉貞星、武曲星、破軍星と呼び、子年生れは貪狼星に属し、丑および亥年生れは巨門星に、寅および戌年生れは禄存星に、卯および酉年生れは文曲星に、辰および申年生れは廉貞星に、巳および未年生れは武曲星に、午年生れは破軍星に属し、その支配を受けるというのである。』以上、金指正三氏。

再び吉野裕子著「易と日本の祭祀」に登場して頂くと、

『伊勢神宮の秘神』

古代日本の天皇は国家主義者であればあるほど中国の皇帝像に自らを近づけ、自身の姿をそこに重ね合わ

せようとする。この一見矛盾した現象は、王の名称に天皇を撰んだと推測される推古朝においてすでに明白であった。「天皇大帝とは北辰の星なり」と『春秋合誠図』に見え、北極星は古くから君主にたとえられていた。北極星の名称である天皇大帝が、日本の王の呼称として用いられるようになったとき、あるいは時を同じくして皇祖神天照も、この宇宙大元の神に習合されたかもしれない。

しかし現身である天皇はともかく、皇祖神であり、且つ日神の天照大神に、このような星神の習合が同時にそう簡単に行われたとは到底思われない。その習合はたとえ時間の問題であったとしても、時代はかなり降るであろう。

その習合の時代はいつか。私はそれを天武朝と考える。

すでに推古朝から天武朝に至るまでに六十五年の時間が過ぎている。その間、白村江の敗戦、壬申の乱のよきな内外の戦はあったとしても国家諸制度の整備、経

済の発展は皇権の格段の伸長を促し、天皇像をたかめる周囲の客観勢は、それ以前のいかなる時代にもまさっていたと思われる。

天皇を神とする、しかも辺士のそれではなく、宇宙的規模における現人神としての認識を自他共にいだき、いだけたのは天武持統朝であった。

しかし事はそれだけではすまなかった。この国土、現世を支配し代表する大和首長の宇宙神への昇格は、同時にそれに対する神界の首長・天照の宇宙神への昇格をもつてはじめて完成されるのである。中国哲学に説かれる、天の北極を中心とした天宮にまで、伊勢をたかめてこそ、この日本の現世・幽界ともに宇宙規模にまで発展させられるのである。

こうしてそれまで東西の横の關係にあつた神界と人間界は、中国風に天と地、上と下の縦の關係におきかえられることになる。この立体的な上下の關係を地上に持ち込んで平面化すれば、神聖方位は日本古代信仰における東方ではなく、「北」または「西北」となる。

北は北極星太一の居処であり、西北は『易』における「乾」で、天を象徴するとされているからである。

内宮・外宮の成立

伊勢を中国哲学による「天」とするためには、天照大神を「太一」に習合させねばならず、そうして次の段階としては当然この太一と不可分の関係にある「北斗」も新しく祀らなければなくなる。しかも中国思想において天を象徴する方位は「乾」（戌亥）であるから、西北の丹波から「止由気」という北斗の神が勧請され、太一を祀る内宮に対し、その西北の度会（わたらい）の地に鎮座されることになった。太一は内、北斗はその外側を廻る神故、ここにおいて、内宮・外宮の呼称が成立した。

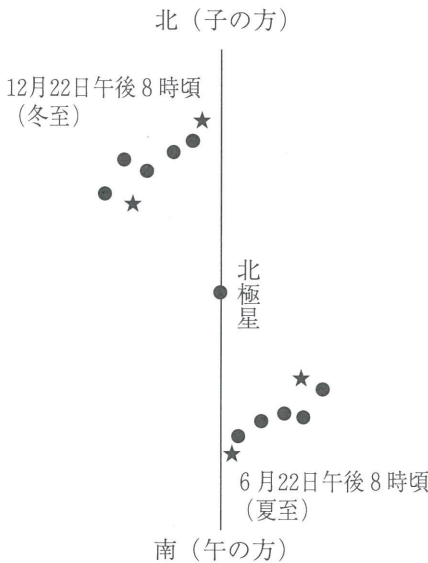
内宮が太一の宮居、外宮が北斗の宮であるならば両宮に伝承される秘紋は両宮の本質を象徴するものである。つまり内宮の屋形文錦は中国風の御殿を模したものであるが、それは太一の宮であることを示し、一

方、外宮の刺車文錦は天帝の乗車としての北斗七星を示し、外宮がその宮であることの表示であらう。

北斗七星について

『一中略』

北斗七星は「璇璣玉衡」という美しい異称をもつ。それは「廻転する美しい璣」の意であるが、従来謎とされている伊勢神宮のユキ大御饌の「ユキ」を私は



冬至と夏至における北斗の位置

吉野裕子著「易と日本の祭祀」より

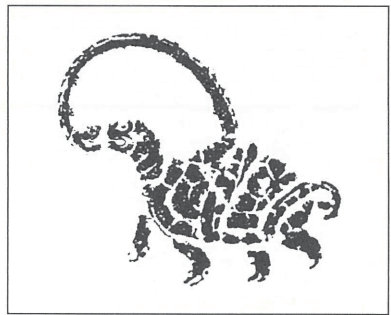
「輸璣大御饌」と解する。「璣」に輸し送られる御饌がはじめて太一に習合されている天照大神に届くのである。事実、北斗が習合されている豊受大神を経由して神饌は天照大神に捧げられている。

中国古代の星空のロマンが天武朝に日本に移され、千数百年間に互って神宮の奥深く息づきながら、秘儀として伝承されている中に謎の霧につつまれてそのあとを隠してしまったと私は思う。』以上、吉野裕子博士。

北辰玄武のシンボルとしての亀

大内氏の氏神「北辰妙見」は密教の諸尊の一つで天台宗では北辰尊星王、真言宗では北辰妙見菩薩と呼ばれている。亀や龍に乗るお姿や日月星辰、十二支を配した様式などがある。

古代中国の思想四神は東に青龍、西に白虎、南に朱雀と北の守護は玄武である。高松塚、キトラ古墳、高句麗や百済の古墳の石室内の四方の壁に描かれている。



玄武

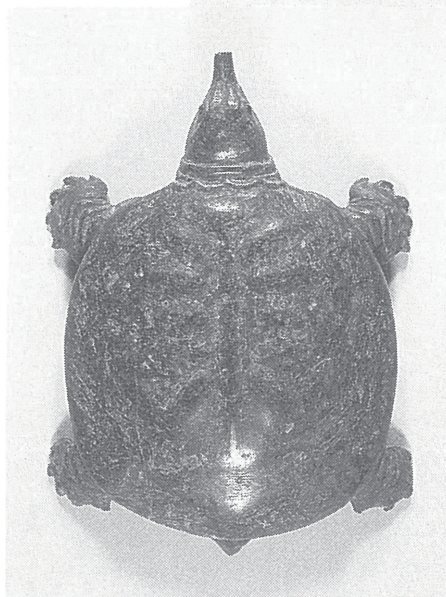
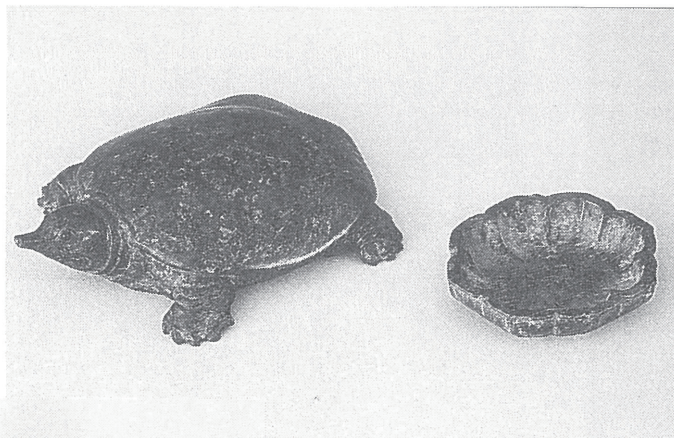
月刊「しにか」大修館書店
Vol. 7 / No. 5 より

北方守護の玄武は亀蛇の組み合わせで雌雄合体した姿である。蛇は生命力の象徴、亀は万年と云い有耳尾毛があれば長寿の目出たい海川の王者である。



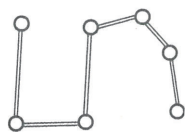
玄武（漢代画像石）

月刊「しにか」大修館書店
Vol. 7 / No. 5 より



第41回正倉院展写真集より
(平成元年)

青斑石龜合子
国立奈良博物館



甲羅部分(北斗七星)

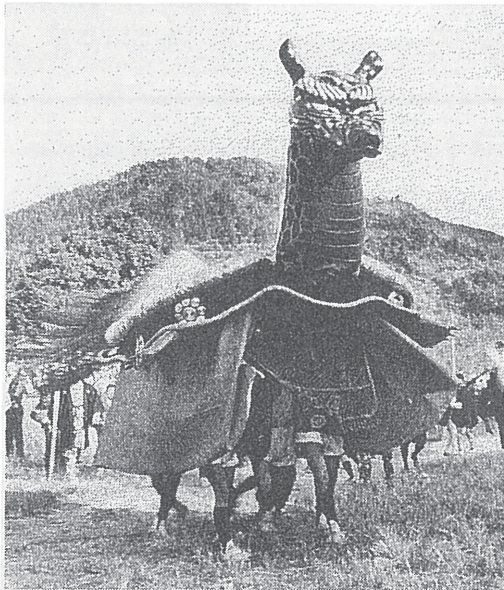
御物を納めた正倉院の宝物に「亀の合子」がある。中国伝来の希宝であつて次の説明がある。

『中倉

青斑石鼈合子せいはんせきべつごうす（スッポン形のおたもの）一合

長一五・〇 幅一〇・〇 高三・五

鼈べつとはスッポンのこと、その姿にかたどつた青斑石製の被蓋造かふせぶたづくりの合子である。蓋はスッポンの這う形に彫り出し、腹部を八稜形に削り、身を納めるようにする。身も同じ八稜形で、内部も輪郭に沿つて八稜形の皿状に削り、底部には高台を設けている。蓋の甲羅にあたる部分は磨いてつやを出し、眼球には深い赤色で透明な琥珀を嵌め込んでゐる。甲羅の中央には北斗七星の意匠があり、近年の材質調査の結果、七個の星は銀で表し、星を結ぶ線は二本の筋彫り線で、その間に金泥を塗つてゐることが確認された。北斗七星の意匠を用いた遺例としては、北倉に伝えられる呉竹鞘杖刀くたけのさやのじょうとうの刀身や、法隆寺と四天王寺の七



八代妙見祭の亀蛇



亀に乗る妙見神

窪徳忠「中国から日本へ―星をめぐる民話信仰―」

佐野賢治編「星の信仰」北辰堂より

星劍が著名であるが、このような器物に北斗七星を刻したものは極めて稀である。北斗七星は北を表わし、スッポンも四神の玄武に通じ興味深い。なお青斑石の材質については、蛇紋石であることが確認されている。

以上　―平成元年「正倉院展写真集」より―

大内氏の氏神を祀る氷上山において北辰妙見の仕者として「鼈亀と蛇」を鷹の餌にすることを禁制したことが符合する。（大内村誌）

武勇の神「応神天皇」と母神功皇后と三女神を奉祀する宇佐八幡宮のご本殿の乾の方に「北辰社」が建っている。大内氏が配祀したとも聞くが、もともと古へに起源があるのではなからうか。二十六代大内盛見は八回も宇佐へ参宮し、古風な大内菱の入った御神輿を施入している。さて遠藤盛遠は上西門院の北面の武士であったが、愛する袈裟御前を誤って斬り、出家して文覚上人となった。伊豆に流罪となり源頼朝に挙兵をす

すめた。八百数十年前の話である。

天帝は地上の天子の後上方から力を与え、南面して座す天子は朝儀を治しめすのである。その背後を警護するのが北面の武士で選りすぐりの屈強な若武者達であった。北辰玄武の思想によるものである。文武百官は最北端の大極殿に参集して政治を進めた。平城京や平安京は中国の北闕思想でつくられた都城であった。源頼朝は氏神として勧請した鶴岡八幡宮の隣に「北斗堂」を建立し崇拜した。楠正成は幼名多聞丸と云い、上杉謙信も毘沙門天信仰をして豊が旗印であった。多聞天と毘沙門天は同じ天部の至尊で仏教守護の四天王の一つである。即ち北方を守護する天尊で元はヒンズーの神である。この信仰の源流も北辰玄武の系譜である。徳川家康の靈廟日光東照宮こそ江戸城眞北の鎮守である。家康のブレインの一人天台座主天海大僧正はその北辰祭祀の真意を込めて徳川家の長久のために日光東照宮造営を進言したと伝えられる。

天台密教の寺門派の本山「三井園城寺」には北辰尊

齊明天皇（皇極重祚）飛鳥亀井石の遺跡
 齊明女帝は天智・天武天皇の御母であり、
 北辰玄武の祭祀と関係があるろう。

筆者撮影 平成12年5月21日



スッポンと舟又は桝に見える。北辰北斗の精を映した祭祀石か。

星王が祀られている。山口国清寺（現洞春寺）にあった大内氏建立の八角経輪蔵を毛利輝元が園城寺に寄進した。輝元が同寺の勧進奉行を勤めていた関係上、大内氏の経輪蔵を寄進して寺門派諸仏の加護を祈念したのである。大内氏の山門派天台に対抗したのかも知

れない。大内氏総氏神の水上山妙見社は往古は北に建ち、総氏寺の水上山興隆寺は天台宗比叡山延暦寺の直轄である。後に延暦寺は山門派、三井園城寺は寺門派とに分れた。天智・天武・持統の三代の天皇の産湯の井戸が境内にあって三井寺と称する。

最近、奈良飛鳥で齊明天皇の祭祀遺跡が発掘された。

「鼈」の石造物であつて用途は未だ諸説あつて確定していないが、北辰祭祀の目的を思わせ非常に興味深い。

江戸期の北辰一刀流開祖千葉周作は門弟三千人を擁した名人であつた。千葉家の屋敷神が「北辰妙見」であつたので、一刀流免許皆伝の後に一派を開くのに北辰の二字を冠して自流の名号としたと云われる。幕末の坂本龍馬も同道場に修行した。高知市に残されている彼の生家は北面して夜には北辰北斗が輝いており、龍馬は正に北辰北斗のもとに生まれたのである。一刀流の奥儀には「反問^{へんばい}」という運足の仕方がある。北斗七星の配列に従つて足を運び、破軍星の方向へ体を預けて剣を抜くのである。大相撲の土俵上の屋根から垂れ下がる四隅の房は四神の色である。青房（青龍・東）、赤房（朱雀・南）、白房（白虎・西）、紫房（玄武・北、紫黒）の四神に守られる。天を表わす円形の土俵と大地を表す四角い盛土の上で東西の勇者が四股を踏む。両力士が激しくぶつかり合つて大地を震動させて「種

の発芽」を促して、五穀豊穡を祈願する。火花が散り

五穀が育つて稔る。神聖な場なので力士は口を噤いで塩を撒いて清める。精進潔斎である。最強の力士は神の依り代^{よりしろ}であつて横綱という注連縄を巻くのである。

土俵の上の大屋根は外そぎの千木、地気上昇を象徴し、風抜き穴は二個。堅男木は五本で陰陽の調和がはかれる。乾坤一擲の大勝負というが、乾は天・陽で坤は地・陰なのだ。御田植えを自らされた昭和天皇は相撲観戦がことさらにお好きであつたが、豊葦原の瑞穂の国の豊作を祈念する国技であるためと思う。

西行法師が伊勢神宮の神前で

「何事のおはしますをば知らねども

かたじけなさの涙こぼるる」

と詠んだと伝えられる。西行法師は出家前の名を左衛門尉佐藤義清^{のりきよ}と云い彼もまた鳥羽院の北面の武士であつた。七という数字は四と三に分けられる。足し引きすれば、九まで全ての数字を生ずる。生数、成数という。また、洋の東西を問わずよく出てくる数字だ。

ラッキーセブン、七福神、七種粥、お七夜、キリスト教でも聖書のヨハネの黙示録に七つの星、七つのラッパ、七つの燭台などが出てくる。

以上の様に北辰北斗の思想がいたるところに反映・散見されて誠に興味深い。

まとめ

一、「高嶺両太神宮御鎮座傳記」巻子の表装の「屋形文」は伊勢神宮内宮の秘紋と同じである。中国風の鴟尾をのせた宮殿は太一、北辰、天皇大帝の住居をデザインした文様である。

また今回発見された「刺車文（小車文）」も外宮の秘紋であって北斗七星を象徴化した和風の優雅な御所車のデザインであった。

アジア文化圏の思想を自家薬籠中のものとして表現する日本の伝統文化の特長を再認識できた。

一、大内氏の氏神北辰妙見は夜空に輝く「陰の世界」の至高神であり、伊勢内外宮の神は明るい「陽の世

界」の至高神である。大内氏が陰陽両世界の最高神を奉祀し、毛利氏も又、祭祀を継承して天下の安寧を祈念したことは山口における「精神文化の華」といえよう。

一、大内義興公が勧請創建した山口大神宮は全国で唯一の勅許を得た伊勢分社であった。さらに毛利氏によって式年遷宮代替地が整備された。この様に式法正しく、格調のある神社は他にはない。私たちは先人の敬神の極みである文化大事業に感謝すると共に全国に誇りにして良いであろう。

神宮の建物や社叢は単なる文化遺産ではない。現在も初詣、七五三や様々な祭事で賑う生き生きとした「祈りと感謝を奉げるお宮と杜」なのである。現代の私たちも平成の式年遷宮に巡りあえたことは正に有難いことであった。

蒙談第32号

原稿募集

形式、内容、枚数等一切自由、評論、隨筆、自分史、郷土史、郷土史研究、創作、詩、短歌俳句等意欲ある文を御寄稿下さい。

原稿〆切 平成十三年三月三十一日
発刊予定 平成十三年五月

蒙談会

。原稿送付先

〒七五三ー〇〇八三

山口市後河原一六三 金本利雄方

電話 083・922・4368

FAX 083・924・8373

。掲載費用についてはお問い合わせ下さい。

。寄稿者には約五〇〇一〇〇冊差上げます。

蒙談三〇号記念会

(出席者紹介)



蒙談三〇号記念会は、去る六月二十三日午後六時半より、セントコア山口(山口市湯田)に於て開催致しました。
当日は雨天にも拘わらず多数の御参会を頂き盛会のうちに終ることが出来ました。
厚く御礼申し上げます。

蒙 談 会

記念会次第

司会進行

和田芳江

1 主催者挨拶

金本利雄

2 祝 辞

佐内正治氏 (山口市長)

末永汎本氏 (弁護士) 外

3 乾 杯

村岡 満氏

4 祝吟・吟舞

鶯風流山口鴻山会

5 蒙談会員・寄稿者紹介

田村幸志郎

(主催者挨拶)

蒙談30号記念会
平成12年6月23日 主催 蒙談会



6 テーブルスピーチ 大田恭次氏

大隅健一氏 和田 健氏

中村恒易氏 松永祥甫氏

小川莊六氏 内田 伸氏

7 映像記録「山口市の誕生」視聴

山口市制作、初公開

8 主催者謝辞 瀬光 博

記念品 色紙掛

浦川尚義篆刻

蒙談三〇号記念会挨拶

金 本 利 雄

蒙談三〇号の記念会を企画致しましたところ、本日は御多用中にもかかわらず、こんなに大勢のしかも各方面の方々から御参会を頂きまして厚く御礼申し上げます。

よく聞かれますことは「蒙談とはどういう意味ですか」ということであります。



(乾杯)



中には蒙談会とは蒙古から帰還した戦友会のことですかと聞く人もあります。

そのときいつも申し上げることは啓蒙という熟語がありましょう。啓蒙は蒙を聞くということですが、それを啓かれないのが蒙で、つまり蒙とはまだ啓かれていない暗い、そしてよくものが判っていない状態を云います。余りかしこくなくとも云えます。

蒙は又幼い、至らないにも通じますので、廻り廻って初心にもつながることから「初心忘るべからず」という諺とも関係があることになります。私たちがよくお別れの時歌う「蛍の光、窓の雪」のメロディーはスコットランドの民謡からとられているそうですが、歌詞の「蛍の光」の原話は中国晋の時代に孫康が雪の光で、又車胤という人が蛍の光で勉強したという故事からとっております。

この話は「蒙求」という本に書かれているものですが、このような説話は日本にも早くから紹介されて奈良時代から戦前の教科書にも数多く載っていることは既に皆様御承知の通りであります。その中から一つ。

中国春秋の話であります、^{はくが}伯牙という人は琴の名手で

したが、その琴の音色を尤もよく理解出来たのは友人の
 鍾子期であつたと云われて居ります。伯牙が琴をひき初め
 ると、「あ、これは雲にそびえる高い山の感じですね」とか
 「お、このひびきは急流を流れる水の音の感じでしょう」等
 と鍾子期は伯牙の琴の音色の心の底までを云い当てる程の
 人でしたが、ある時突然病を得て死にます。

優秀な聞き手を失つた伯牙は「もう自分の琴を理解し
 てくれる者は失くなつた。」と琴を斧で断ち割り再び琴
 を引くことはなかつたといひます。

音楽も文章も舞台も又スポーツも然り、文章を書く人
 も、それを読む人も、舞台で演じる人もそれを観る人も
 然り、この両者が混然一体となるとき、至福の状態が生
 じて来るのではないでしょうか。そうした願いをこめて。

蒙談のこれまでの三十号は、読者と作者の交流を願つ
 て続けて参りました。

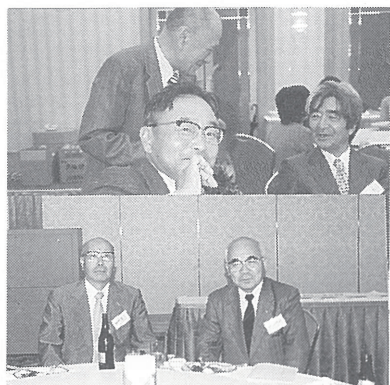
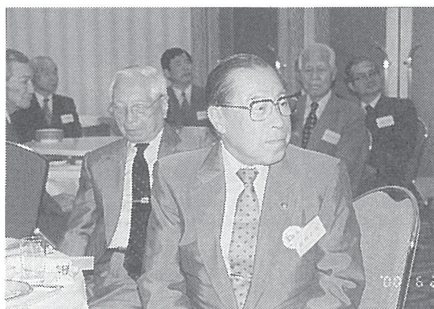
本夕は誠に軽少なおもてなしでございますが何卒最後
 まで御歓談下さいます様お願い致しまして開会の御挨拶
 と致します。

有難うございました。

蒙談30号記念会出席者

過分の御芳志を頂きました。御礼申し上げます。

荒巻	大拙	木梨	亮一	西島	勘治
井上	洋	栗林	和彦	野口	一夫
伊豆	利夫	熊野	汎美	原田	良一
岩田	健	櫛崎	義一	福岡	善平
池田	孝一	小林	真人	船本	功
内田	伸	合志	栄一	前田	敏統
浦川	尚義	佐々木	誉之	松田	康義
江戸	康尹	佐内	正治	松永	祥甫
岡村	秀夫	柴田	眼治	升井	卓彌
大隅	健一	柴田	阿佐子	三好	郁子
岡田	富男	末永	汎本	宮内	一二男
小川	莊六	杉山	保登	光永	惇
大塚	博久	陶山	祐二	光田	善治
大田	恭次	瀬光	博	村岡	満
大浜	勇	竹重	勇二	村岡	正義
河村	聰雄	田村	茂照	山野	芳樹
河崎	満	田村	幸志郎	山内	資彦
金本	利雄	俵田	颯夫	横田	谷夫
金本	達己	富永	和信	和田	健
河村	春男	富永	嘉子	金本	道子
兼重	元	中村	恒易	金本	晶子





(司会進行)



平



(祝 吟)

祝 電 (敬称略) 山口県知事

二井 関成

野口 義廣
清水 顕太郎
福井 和代
渡辺 明美

御 芳 志 (敬称略) (欠席者)

山本 一成 上利 和男
白松 久 徳田 修
福田 百恵 有吉 昇一
上田 敬介 宮川 安雄
荒瀬 剛一 清水 昭宏
池部 豊 杉山 英正
蔵本 永生 小沢登米子

上野 孝明
多田 みちよ
野口 英男
野原 清司
綜合印刷(株)

有難うございました。

続・山口大神宮考

― 神社建築と陰陽思想 ―

柴 田 眼 治

山口大神宮の社殿や元宮である伊勢神宮の建築様式の特徴や内外宮に納まる

せきれいものにしき

「鶴鶴文錦」の意義について先賢諸家のご研究を紹介して考察したい。

神社建築の意義

矢野憲一著「伊勢神宮の衣食住」（東書撰書）によれば

『唯一神明造のご本殿

山口大神宮は大内義興公創建当時は今の建築様式と違い、もつと略式の建物で両宮が並立し、東面して建てられていた。寛文年間、毛利綱広公の代になって現在地に移され、今のように北に内宮、南に外宮が共に南面して建てられた。様式も元宮と比して小型で、変形した神明造りになった。特筆すべきは、式年遷宮のために伊勢と同じように代替地が用意されたことである。

神宮の建築は美しい。写真をご覧いただいてもその清楚で明るく豪華なことがわかりただけるだろうが、実際に目近かに拝されるなら、その圧倒されるほどの荘厳さと美しさにきつと息をのまれることだろう。

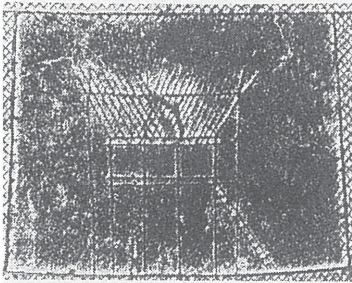
これまでこのすばらしさを世界にはじめて紹介したのは、ドイツの有名な建築家、ブルーノ・タウトだとされてきた。

「伊勢は世界の建築の王座だ。芳香高い美麗な檜、屋根の萱、こうした単純な材料が、とうてい他の追随を許さぬまでに、よく構造と融合している。形式が確立せられた年代は正確にはわからず、最初にこれを作った人の名も伝わらない。おそらく天から降ったもので

● 遷宮まちかの内宮御正殿
(昭和48年8月撮影)



● 棟持柱が描かれている
伝香川県出土の銅鐸の絵
(弥生後期)



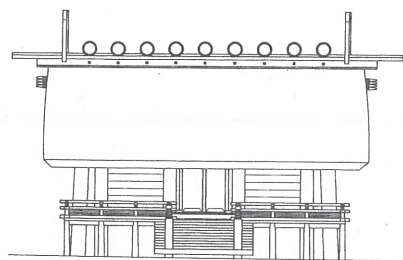
矢野憲一著「伊勢神社の衣食住」
東書選書より

あろう」

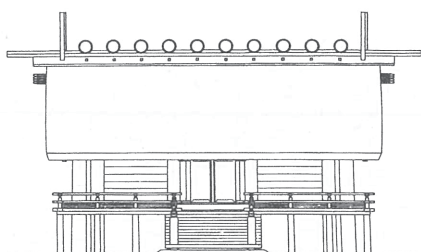
タウトが神宮に参拝したのは昭和八年(一九三三)である。だがそれよりずっと先、明治七年(一八七四)に英国人のクリストファー・ドレッサーが神宮に参り、『日本・その建築美術と手工芸』なる大冊を明治十五年(一八八二)にロンドンで出版している。彼は明治政府が先進文化を急速に移入するため指導者として雇用了た、いわゆるお雇い外国人で陶器のデザイナーだった

たが、日本の文化を精力的に取材し、神社や美術工芸はもちろん民具や民家の便所や風呂まで、よくまあこれほどと感心する記録を残していた。その中で「伊勢」に六頁ほどついやし、五十鈴川の聖なる流れで手と口をすすぐ作法から社殿の美しさ、特に神垣のいろいろのデザインやご正殿のスケッチまで入れて紹介している。

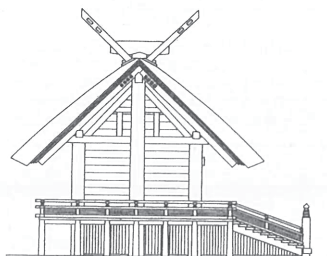
この本は世に知られていない。英国で



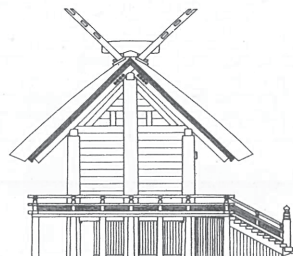
正面



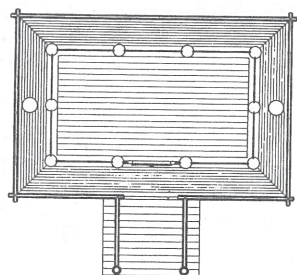
正面



側面

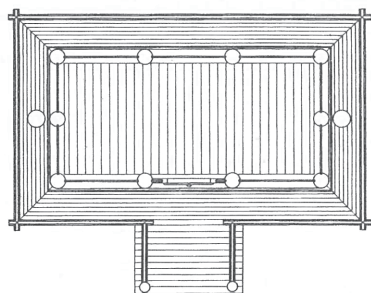


側面



平面

外宮正殿



平面

内宮正殿

写真 石元泰博「伊勢神宮」岩波書店のうち
稲垣榮三著
「伊勢神宮の建築とその象徴体系」より

も稀観本らしく出版社の社長がつい先日大事そうに私を訪ねて内宮神楽殿へ持つて来られた。

私はコピーをお願いしたが傷むからだめだといい、写真ならOKというのでスナップをさせていただいた。百十年も前にこれほどくわしく神宮を客観的にスケッチし紹介した英語の本があるとは驚きであった。

神宮の建築様式は「唯一神明造」という。その特色をあげると、

堀立て柱に萱の屋根、切妻造りの平入りで、屋根には破風が延びる千木があり、棟の上には豎魚木が並び、棟の両端には棟持柱がある。すべて直線式で、必要な覆い金物や飾り金具のほかはほとんど装飾がなく、檜の素木造である。

内宮の千木の先端は水平、外宮は垂直に切られ、御正殿の豎魚木の数は、内宮が十本、外宮が九本、その他の殿舎は内宮が偶数で外宮は奇数となっている。

社殿は真南に面し、御正殿を中心にして内宮は後方左右に東宝殿・西宝殿を配置し、外宮ではそれを前方

左右に従えている。その周りには瑞垣、内玉垣、外玉垣、板垣の四重の御垣をめぐらせている。

地面から正殿の棟の高さは十メートル余、御床までは二メートル五十センチと壮大である。この原型は弥生時代の高床式の稲倉にあるとされ、銅鐸にも棟持柱をもつ高床穀倉が描かれている。稲魂や神々をまつる高倉がやがてこうした神殿に発達したものと考えられ、配置などには古墳時代の宮殿の様式も加わっていることと思うが、なお弥生時代の素朴さを失わずによく今日に伝わってきたものだ。

殿舎に関する具体的な資料は奈良時代までさかのぼれるが、そのくわしい建築と歴史は福山敏男著作集『神社建築の研究』（中央公論美術出版）など専門書をご覧いただく。

世界的に著名な聖書学者アンドレ・シュラキ教授は先年神宮に参拝し、「これまで私は世界の聖地といわれる所を巡ってきた、その中で感動した神殿が五つある。一つはエルサレムの神殿跡、二つはペルー山中の

マチュ・ピチュの壮大な神殿、三つ目はギリシャのデルファイ、そして北京の紫禁城、いずれも廃墟となり、今も祈りが捧げられている所もあるが観光客で賑わうだけ、この伊勢神宮だけは生きた神殿として今も生きた礼拝がなされている、驚いた」と目を輝かせて私に語ってくれた。

米国議会図書館の元館長で現代アメリカの最高の秀才といわれる一人、ダニエル・プアスチン博士も、「日本国民は天皇陛下という宝をもって幸せだと感じているなら、もう一つここにも宝があった」と神宮の建築のすばらしさ、ことに二十年ごとに生まれ変わるシステムのすばらしい発想を理解してくださり、私が遷宮には二百二十億円の費用がかかり、高層ビルが二つもできるからもつたいないという人がいると伝えると、「冗談じゃないよ、世界に一つしかないものの価値がどんなに大きいのか、日本人はもつと

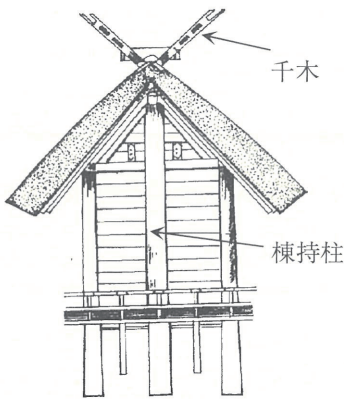
知らねばならないね」と語った。

こうした日本の宝、世界の宝を伝えてきたのは式年遷宮という制度があったからである。』と述べておられる。

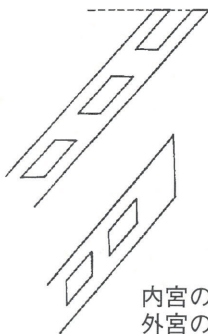
建築様式にみる陰陽思想

さてその建築形式にどのような意義があるのであろうか。長原芳郎著「陰陽道」（雄鶏社）には次の解説がある。

『棟持柱と棟木と千木
むなもちしら　むなき　ちぎ



棟持柱と棟木と千木



内宮の千木 (上)
外宮の千木 (下)

切妻屋根の端が見える側を妻側つまがわとよぶが、その中央に、建物の壁からすこし離れて独立してたつ柱が、屋根の棟木をささえている。この柱を棟持柱というのである。

神社建築には、弥生時代の穀倉としての高床倉たかゆかぐらの形式をとっているといわれるが、高床倉の入口が妻側にあったときは、両妻の屋根が大きく張り出していた、それを支えるための独立柱が棟持柱であった。

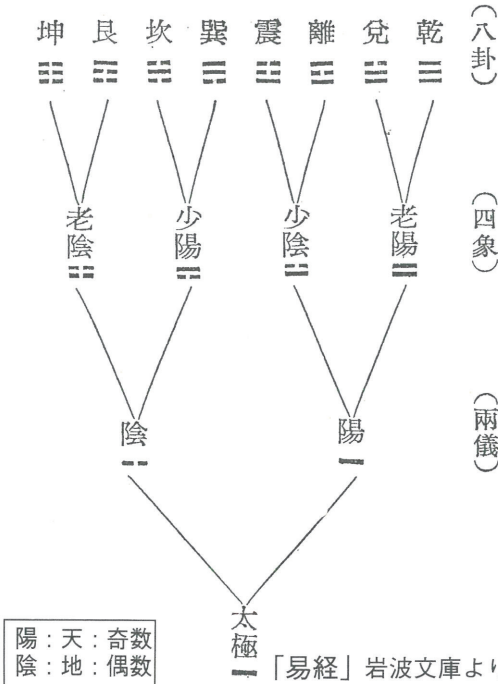
伊勢の内、外宮は平入りで、妻の出が小さく、構造的には棟持柱の意味を失ってきたが、伊勢神宮には、棟持柱が厳然として残っている。その理由は、いまだに解明されていない。

陰陽道というと、棟持柱は、南、北を現わしている。とはいえ、地図の南北ではなく、天を南とし、地を北とした南北で、上、下を南北とするのである。

棟持柱は、天気下降、地気上昇すなわち陰陽交わるためのパイプと考えればまちがいない。伊勢神宮のすべての柱は、礎石の上にすえない、直接根本を地中にうめた堀立柱である。これは、地気を上昇させるため

のものと考えられる。棟持柱の上にある千木は、陰陽交わった姿である。神社は、天、地の自然に則って正しき行ないをする場所であることを千木が明示している。

内宮の千木は、先端が水平（内そぎ）に切られている。



千木のくり抜いてある穴が、内宮は三つあり、外

「易経」岩波文庫より

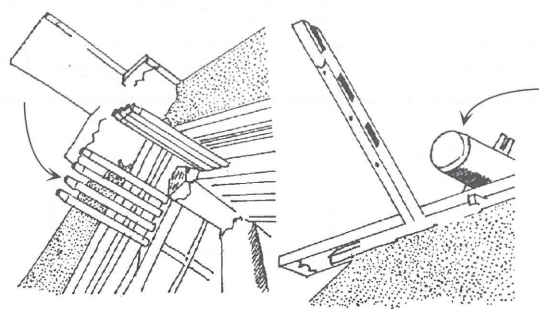
宮は二つである、三は天の数で、二は地の数である。

棟木は棟持柱の南北すなわち天地を現わすに對し、東、西を現わす。これも地図の上の東西でなく、左（東）右（西）の意味で、「人」の用を示す。棟持柱と棟木の關係は「天地」の氣が「人」の用をうみだす關係を示したものである。

東は、日出ずる方角で、万物が発芽し、發展する方角である。西は日の沈む方角で引退を意味する。「棟」という字は木扁に東という字でできているが、棟は、屋根の一番高いところをいうので、家のシンボルである。すなわち家は人が大飛躍するために存在するのである。

古代の新築祝いの言葉、すなわち室祝の寿詞の一節に「築き立つる柱は、この家君の御心の鎮りなり、取りあぐる棟梁は、この家長の御心の林なり」とあるが、「林なり」というのは、林のように繁茂し栄えるという意味で、柱と棟木の關係をよく物語っている。

鞭懸は八本あって、八方位、八掛を現わしたもので



鞭懸（むちかけ）

鯨魚木（かつおぎ）

ある。私は、鯨魚木の何たるかを調べるために、四百余りの神社にアンケートを出してみたが、私の期待する返事は得られなかった。しかし、熱田神宮庁より親切な御返事をいただいたのでそのまま紹介する。

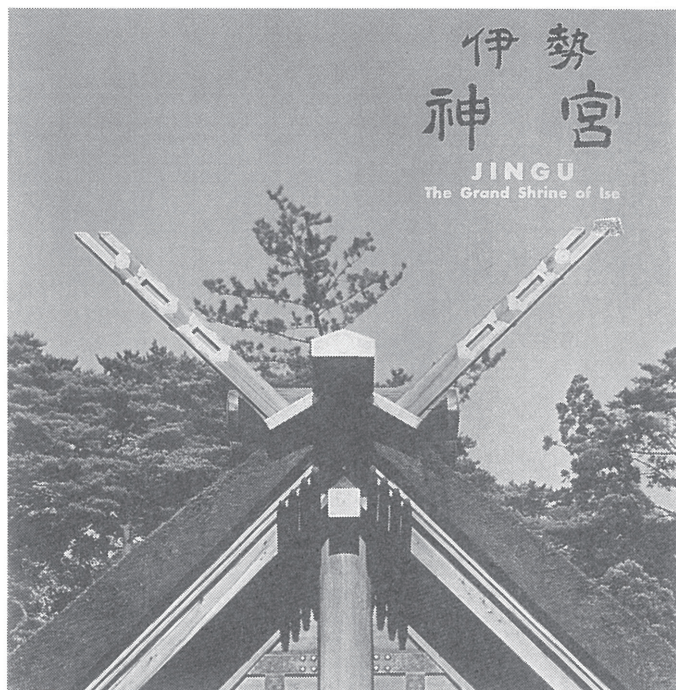
「鯨魚木のいわれ」

鯨魚木・葛緒木・勝男木とも書く。古事記には単に

「鯨魚」と記されている。屋上の葺の上に直角の方向に並べられる木、その形状が鯨節に似ているためにできた呼称というのは附会の説で、もとは風を防ぐために棟を押さえて鎮めるための実用のもの。往古は藁、茅

伊勢 神宮

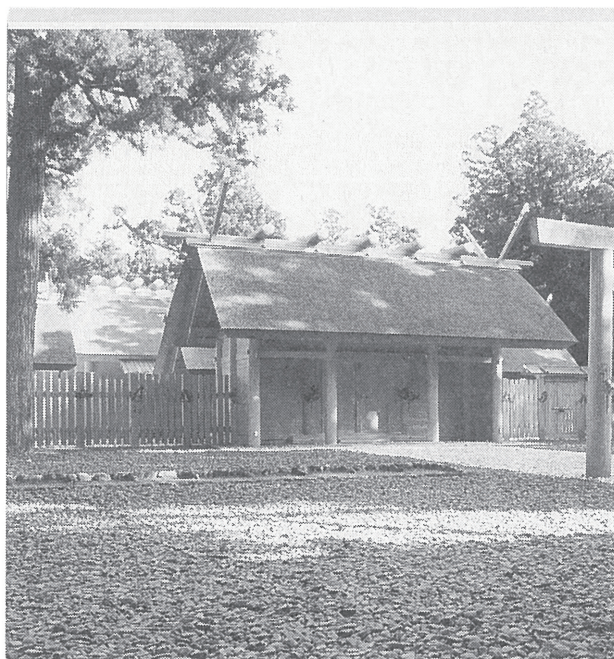
JINGŪ
The Grand Shrine of Ise



「伊勢神宮」神宮司庁発行より転載

内宮正殿の千木・豎魚木

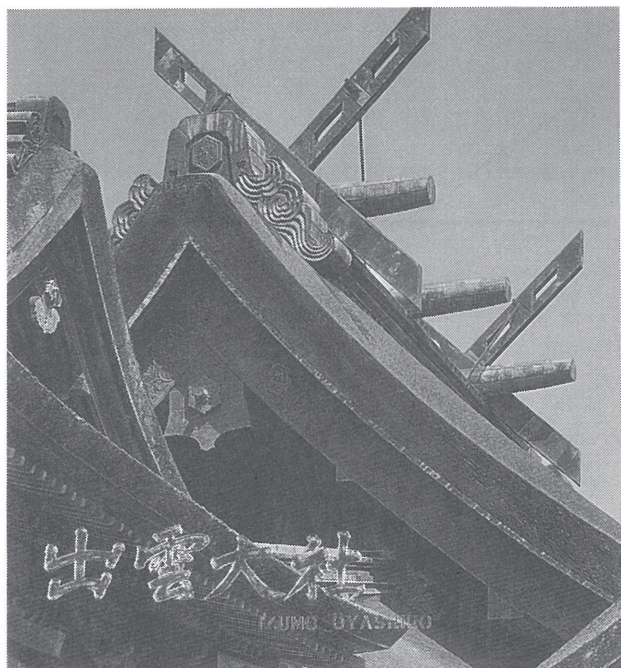
伊勢神宮の正殿の千木は内そぎで天気が降。風抜き穴は三個で陽、天の数。豎魚木は一〇本で陰、地の数。陰陽のバランスは絶妙である。



伊勢神宮外宮

豊受大神は穀物神

千木は外そぎで地気上昇、豎魚木は正殿は九本、陽、天の数。風抜き穴は二個で陰、地の数。



「出雲大社」社務所発行より

千木と豎魚木

出雲大社は、祭神は大国主大神で、国津神の代表である。千木は外そぎで地気上昇。風抜き穴は2ヶ所で陰、地の数。豎魚木は3本で陽、天の数。陰陽のバランスがとれている。

などで屋根を葺き、その棟の押さえに丸太を藤葛などで結んだ遺風で、堅固に結束したので豎緒木とも、また葛で結んだので葛木ともいった。一説には、頭にかつくことをかづくというので、頭衝かぶつおき小木の意であるともいう。

建築の変遷と共に建築技術が進歩したので、神宮神社では古いてぶりを伝え、且つ装飾的にも勝れたものとして用いている。

「古事記」雄略天皇の条や埴輪などによると上代の皇居や豪族の住宅などに用いられたもののようであるが、後には専ら神社の主要建物にのみ行われるに至り、千木を伴うのを例とし、実用よりもむしろ莊嚴を目的としたものとなった。神明造りでは、豎魚木の下に樋貫ひぬきを置き、上代の実用的な遺風を伝えている。その形は両端をそぐことを原則とし、断面は円形、方形、方形で上端に鑄しのぎをつけたもの、八角形のものなどがある。」以上の文中で、「鯉節に似ているためにできた呼称というのは附会の説である」というご意見に対し、

私は異なった考えを持つ。いわれなくして、魚という字が使われていないと思う。豎魚木の最も重要な意義がここにあると思うのである。魚は、一白の系類で、水という意味がある。屋根の一番高い場所の、高いは、九紫の系類で火という意味がある。すなわち、火の上に水があるので、易経の「水火既濟」という卦にあってはまる。「既濟」の濟という字の本義は、水を渡ることとで、こちらの岸から向うの岸へ渡ってしまうことである。すなわち水を渡ることが成就したのである。それから転じて「既濟」は、すべてのことが成就したことをいう。「水火既濟」は「雷山小過」という卦の次にあるのであるが、小過の卦から既濟の卦に移ることを「物に過ぐる有る者は必ず済る、故に之を受くるに既済を以てす」と説明されている。人に過ぎたる道徳、才能があり、人に過ぎたる努力があれば、志すところのことがすべて成就し完成する。これが「既濟」であるが、凡人にはなかなかむつかしいことである。孔子は、天地自然の法則にしたがって、努力（労働）する

人を聖人、または神といっているが、豎魚木は棟持柱と、棟木と相関連してこのことを教示しているのである。すなわち神社の豎魚木は、天地の自然の法則にしたがって人が努力すればすべてのことが成就するということを示しているのである。また水火既濟を「卦たる、水、火の上にあり、水火相交われば、則ち、用を為す。各々其の用に当る。故に既濟と為す。天下の万事已に済るの時なり」と説明されている。水が火の上であれば、上の水が下の火によって暖められ、熱せられ、食べられる物がみな善く煮られ、料理がうまくできあがる。これを既濟の卦の象とされている。

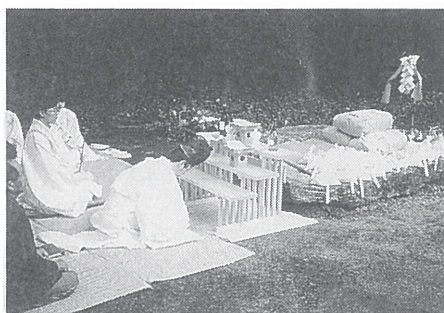
古代、魚をよく煮て干し、「これを「豎魚」といって、「勝魚」のあて字による縁起から、朝廷、神社に献上された。今日でも鰯節がおめでたいときの贈答品とされるのもその伝承である。豎魚木を勝魚木と書くのはそのためである。

易数には奇数を陽、偶数を陰とする見方がある。

伊勢神宮の内宮の本殿の豎魚木は十本で別宮は偶数

を用い、外宮の本殿は九本で、別宮もそれぞれ奇数を用いている。内宮は天の気の神で陽であるのになぜその豎魚木が偶数の陰であるのか、外宮は地の気の神で陰であるのになぜその豎魚木が奇数の陽であるのか、読者は奇異に感じられるであろう。これは陽中陰あり（動中静あり）、陰中陽あり（静中動あり）ということなのである。人の目には陽性は、かえって陰性が強く、陰性は陽性が強く感じられる。（中略）

次に、伊勢内宮の本殿は拾本の豎魚木をいただいているが、拾の字は手へんに合わせるで、人が神社で手を合わせて拝むのは、天地の自然の法則にしたがって正しくすることを神に誓いをたてることである。十の字は―（南北）すなわち天地と、一（東西）すなわち人が渾然と融合した理想郷を現わす。』以上、長原芳郎氏。各地の神社の千木豎魚木をみることでそのお宮の御祭神が天津神か国津神かが推定される。千木の外そぎ、内そぎは男神、女神との通説があるが、乾坤、天地とする長原説の方がよく合致するようだ。但し、



山口大神宮の舂置岩で稲舂のお払い
「正直やまぐち Vol. 28」より

現在のお宮の建物は後世の補修によって形式が変わっていることがあるので注意を要する。大陸や半島から「易経」など陰陽思想が移入し、様式化したとの説も首肯されるのである。

日本人と神々

森宏太郎著「暮らしのなかの神々」（牧野出版）によれば

『われわれ日本人の
日頃のくらしの中で
の例をあげて見よう。
たとえば、どの家庭
でも見られる三度三
度の「御飯（ごはん）」
とその時の「いただき
ます」のあいさつ。
なぜ、「御飯」とか
「いただきます」とか
敬語をつけていうの

だろうか。それは、「御飯」の「御」も「いただき」も「神」に由来しているからなのである。

「御」という敬語がついているのは、それがほんらいは「神」への「供（そな）えもの」だからであり、「いただき」も、「神」から「頂戴」するからなのである。なお、「ます」ということばも、ほんらい、「神」が「おられる」ことを意味する「坐（ま）す」から来ているし、「御飯」の「飯（めし）」も、ほんらい「神」が「召（め）し上る」ものなのである。

さらに、「食べ物」ということばにしても、ほんらい「たべ（賜（た）べ」給（たべ）もの」、すなわち、「神」から「賜（給）わたしたもの」から来ているのである。

さらに、他の例をあげれば、「酒」とその飲み方がある。

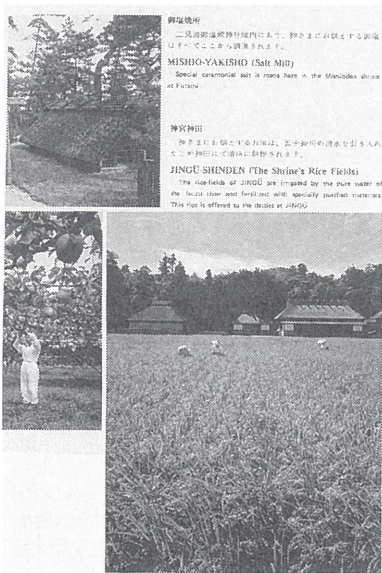
「お神酒（みき）上らぬ神はない」ということばのとおり、もともと、「酒」と「神」とは不可分のものである。「さけ」ということばはほんらい、「栄（さか）え」から来ており、「酒」は、ほんらい、神の「栄え」

を祈る飲物なのである。

従って、日本人の飲み方としては、「神」と「人」とで飲む「共飲」が本来の姿であり、「飯」にしても、「神」と「人」との「共食」が本来の姿なのである。

われわれ日本人の「社交」や「社会」の基本は、この「共飲共食」にあるといってもよい。

見ず知らずの初対面の人でも、「二つしよに飯を食い」、「一しよに飲（や）」れば、あたかも、「百年の知己（ちき）のごとく」なれるというわけである。



「神 宮」伊勢神社崇敬会より

さて、いま挙げた「御飯」「飯」「食べ物」「酒（米から作った加工品で、いわば米のエッセンス）」などを作り出すものは、いうまでもなく、「農業」である。

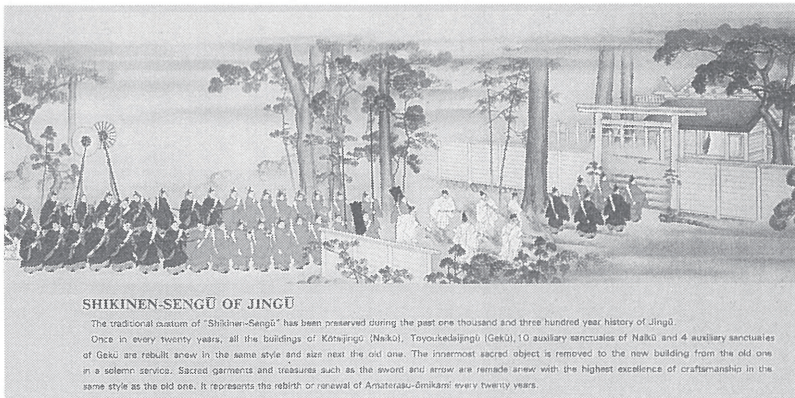
日本民俗学の父、柳田国男先生は、「農業とは日の神と水の神との結婚である」と喝破された。

私なりのことばでは、「農業とは、祈りと神事の中から生れた。」「農の心とは、自然に対する敬虔である。」といったのである。

ところで、いま挙げたいいくつかの例のように、われわれ現代の日本人とその暮らしの中にも生き続けている「神」とはいったい何なのだろうか。

それは、後に述べるが、一言で述べれば、「日本の神」とは、日本人の暮らしの基礎をなしてきた「農業」などにとって有用な「自然」とその働きに対し、農民たちが懐いた素朴な感謝や畏怖の対象なのである、といつていいであろう。

その感謝や畏怖を「祈り」と見、「信仰」と見ることもできるが、その「日本の神信仰」の本質とは、農



SHIKINEN-SENGU OF JINGU

The traditional custom of "Shikinen-Sengu" has been preserved during the past one thousand and three hundred year history of Jingu. Once in every twenty years, all the buildings of Kotajingu (Naiku), Toyokodajingu (Geku), 10 auxiliary sanctuaries of Naiku and 4 auxiliary sanctuaries of Geku are rebuilt anew in the same style and size next to the old one. The innermost sacred object is removed to the new building from the old one in a solemn service. Sacred garments and treasures such as the sword and arrow are remade anew with the highest excellence of craftsmanship in the same style as the old one. It represents the rebirth or renewal of Amaterasu-Omikami every twenty years.

民の「昔からの習慣」なのであり、明治時代の歴史学

者久米邦武博士の言をもってすれば、「祭天の古俗」なのである。

式年遷宮「神宮」伊勢神社崇敬会より

「農業」がいかに「神」と強く結びついてきたかは逐次述べていくが、全国各地で行われている「祭り」にしてもその本質は、農民の「神を待つ心」から来ているのである。「祭（まつ

り」とは、「待（まち）」から来ている。

従つて、非常に重要なことは、日本の「神」の、「神社」の中に祭られているという姿は、むしろ後世の姿であり、農民たちが「天」や「山」などの「自然」に向つて祈つてゐる姿の中にこそ日本の「神信仰」の本質があり、従つて日本の「神」とは、あるがままの「自然」の中に宿つてゐる存在と考えていいのである。すなわち、日本の「神」とは、根源的に「自然神」といつていいのである。

そして、「自然の神」は、ただ、「自然」の中で眠つてゐるのではなく、たとえば、「山」の神が春先には山から降りて「田」の神となつて農業を取り仕切るといわれるように、「人間」の方へ出向いてくれるとされているのである。

いずれにせよ、日本の「神」の本質に迫ろうとするとき、私は三つのカギが必要だと思う。その一つは、「自然」との関係、その二つは「農業」との関係、その三つは「神社」との関係である。

さて、わが国にはゴマンと、いやそれどころではない、十数万もの「神社」があるが、それらは新旧、大小、まちまちで、これを体系的に説くことは非常にむずかしい。

しかし、幸いなことに、「式内社」というものがある。

「式内（しきない）社」とは、正式には、「延喜（えんぎ）式内社」といい、約千百年前の醍醐（だいご）天皇の延喜年間に制定された「延喜式」の第九巻第十巻の「神名帳（じんみょうちょう）」に登載された由緒ある格式の高い神社のことである。（なお、「式」とは、「法」「律」「令」「格」などと同じく法令の一種である。）

「式内社」は、単に「式社」ともいわれるが、また、「官社」ともいわれた。それは、朝廷が選んだ格式が高い神社であるが故に、神祇官に命じて、二月の「祈年祭（としごいのまつり）」の際、幣帛（へいはく）を捧げさせたからである。中央の官吏が弊を捧げる神

社を「官弊社」といい、地方の官吏が弊を捧げる神社を「国弊社」といった。官弊社は七百三十七座、国弊社は二千三百九十五座で、計三千百三十二座。そして、式内社の数は、二千八百六十一社。

八百萬の神がみ

「八百万（やをよろず）の神がみ」ということばがある。そのようにわが国には無数の神がみがある。

「神社」の数は、無慮十数万ともいわれているが、「神」がみの数はそれどころではない。数もそうだが、種類もおびただしい。

「天」「地」「日」「月」「火」「水」「木」「金」「土」「山」「川」「石」などの自然に関するものを始めとして、「国」や「村」、「氏族」などの「社会」に関するもの、「農業」や「漁業」などの「産業」に関するもの、「衣食住」など「生活」に関するものなどなど、「日本の神」は、森羅万象のすべてに存在しているといつて過言ではないのである。

「石ころなどに『神』がいるなんて」と、西欧人な

どはいい兼ねないだろうが、「日本の神信仰」は、キリスト教やマホメット教などの「唯一絶対の超越的な存在」に対するものとは異なり、「無数の身近かな存在」に関するものである。

すなわち、「日本の神信仰」とは、「自然」の、あるがままの「山」や「川」や「石」や「木」などを「神」として拝むという、いわゆる「自然信仰」がその本質である。

それはまことに素朴な「民間信仰」であり、「宗教」というよりは「民俗」に近い。

さらに、その場合の「自然」とは、「人間」に対立するような「自然」ではない。

「人間」の生活の営み、とくに「農業」と深いかわり合いをもつ「自然」なのである。

わが国では多くの人びとの生活の営みは「農耕」に始まった。

「天」や「山」や「木」や「川」は、「農耕」に欠くことができない「水」をもたらししてくれる。

それ故に、これらの「自然」は有難い存在として、「神」としてあがめられてきたのである。また、「農作物」を栽培する場としての「地」と「土」。

「農具」を生み出す「金（金属）」とその精錬に欠くことのできない「火」。

さらに、「農耕」に絶対不可欠の「日」とその運行によつて「農耕」の適期を知ることができる「月」。

これら、「天地」「日月」「五元（火、水、木、金、土）」「山川」などの「自然」の存在なくしては、「農耕」は成り立たず、従つて「人間」の生活もなり立ち得ないわけである。

従つて、「自然崇拜」に根ざした「日本の神信仰」を、「農民たちの生活の必要に根ざした習俗」と定義することができると思ふのである。

ところで、「日本の神がみ」には、どんな神たちがいるのだろうか。

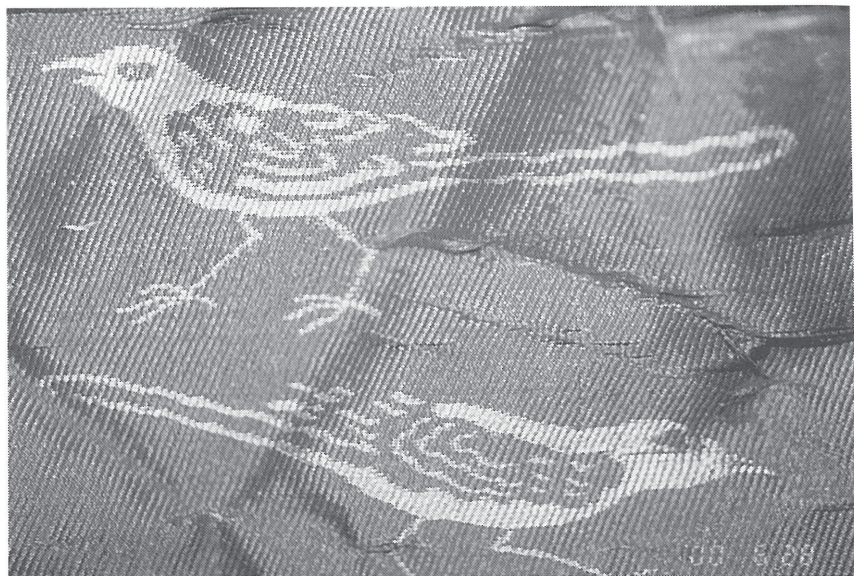
「八百万」ともいわれる、いわば、無数の神がみを一々挙げていつてもきりがなしい、あまり適切とは思

われない。先ほど述べたように、様々の「自然」に対応して「日本の神がみ」があるのだから、様々の「自然」を分類し、それごとの「神」を挙げていく方法によつて、「日本の神がみ」の姿を明らかにしてゆくことができるであろう。』と森宏太郎氏は述べておられる。

せきれいものにしき 鵺文錦について

伊勢神宮及び山口大神宮の正殿御扉之帳に鵺文の錦がある。鵺で思ひおこされるのは日本書紀の国生み神話の次の記述である。

『一書に曰はく、陰神先づ唱へて曰はく、「美哉、善少男を」とのたまふ。時に陰神の言先づるを以ての故に、不祥しとして、更に復改や巡る。則ち陽神先づ唱へて曰はく、「美哉、善少女を」とのたまふ。遂に合交せむとす。而も其の術を知らず。時に鵺有りて、飛び来りて其首尾を揺す。二の神、見して学ひて、即ち交の道を得つ。』



今回発見された山口大神宮正殿御扉之帳に使用されていた鶴亀文錦の端切れ。小車文錦と同時に宮司が出してこられた。

(筆者撮影 H.12.6.28)

一和名抄に「鷺鷥／積霊二音、字、或作「鶴鷥」、瀬波久奈布利▽」。ニハは俄（にはか）の語幹。クナは、尻の意。フリは振る意。速く尾を振り動す鳥の意。イシクナギともいう。この鳥は世界各国語で、尻振りとか尻たたきという観点から名づけられている。それが日本では交合または生殖と関連して考えられて来た。』日本書紀巻第一（岩波文庫黄四一一）

菅原浩・柿澤亮三編著「図説日本鳥名由来辞典」柏書房(株)によると鶴鷥について次のように書かれている。

『せきれい【セキレイ類】

“せきれい”は、セキレイ科のセグロセキレイ、キセキレイ、ハクセキレイなどセキレイ類の総称である。いずれも水辺にすみ、尾を振り動かす点は似ている。形は似ていて、いずれも尾が長い。セグロセキレイは、顔、喉、背が黒く、腹は白い。キセキレイは、頭と背が灰黒色で、喉が黒く、腹が黄色である。ハクセキレイは、頭頂、喉が黒く、背は灰黒色で、顔と腹が白い。セグロセキレイ、キセキレイは全国に広く住んでいる。

が、ハクセキレイはやや少なく本州中部以北で繁殖する。

セキレイ類は、奈良時代に、「つつ」「まなはしら」にはくなくぶりの名で知られていた。「古事記」中つ巻、神武天皇紀に、大久米命が天皇の命令で伊須余理比売を訪れた時に、姫が大久米命の入墨をした眼をみて詠んだ歌「胡鵲子あめ 鵲つ 千鳥 ま鴟 など黥さけ

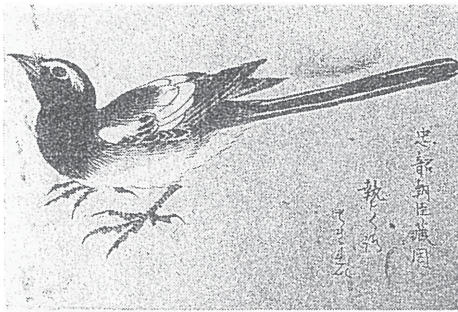


図393 セグロセキレイ セグロセキレイ (堀田禽譜)

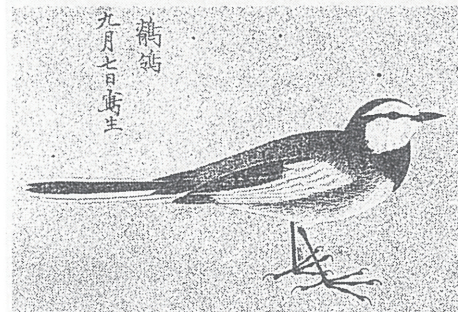


図394 鵲 鵲つ ハクセキレイ (百鳥図)

る利目とめ」に「つつ」(セキレイ)がでている。「つつ」の名は鳴声からつけられたものであろう。「古事記」雄略天皇紀に、天皇が長谷で宴をされた時の歌「もしきの 大宮人は……鵲まなはしら 尾行き合へ……」に「まなはしら」(セキレイ)が詠われている。「まなはしら」の語源について、大言海には、「諸冊の二神 天の御柱をめぐり 鵲つの交合せるを学びしより起る名」さらに、

「日本書紀」卷一、神代上、諸冉の二神の国生みのところに「時に鵲にはくなくぶり有りて 飛び来りて其の首尾を揺すかしらをも うつか ふたはしら 二の神 見して学みそなほひて 即ち交とつぎの道を得つ」とでている。「にはくなくぶり」の語源について、大言海は「庭揺にはくなくぶりき觸あり」で尾をゆれ動かして庭にふれるからとしている。

平安時代になると、セキレイは「とつぎをしへどり」(倭名類聚鈔)「にはたたき」(「日本霊異記」と呼ばれるようになった。「とつぎをしへどり」(嫁教鳥)の名は、国生みの神話から生

まれたものであり、[〃]にはたたき[〃]はセキレイが尾を上下させて庭を叩くからであらう。

鎌倉時代の「夫木和歌抄」巻二十七には、一二八九二「さらぬだに霜がれはつる草の葉をまづうちらはふ庭たたきかな」、一二八九三「女郎花おほかる野辺の庭たゝきさがなき事な人にをしへそ」に[〃]にはたたき[〃]が読まれている。平安時代から[〃]いなおほせどり[〃]という鳥が和歌に詠まれているが、この鳥は古今伝授の三鳥の一つで、難解な鳥名である。スズメともいわれるが、キセキレイという説がかなり有力である。「袖中抄」第二十一、一〇五四「あふことをいなおほせ鳥のをしへずば人を恋路にまどはざらまし」の[〃]いなおほせどり[〃]はセキレイを詠んだものと思われる。室町時代になると、漢名、鵲鴒を音読みにして[〃]せきれい[〃]（「下学集」）と呼ぶようになり今日にいたっている。また[〃]いしたたき[〃]（「藻塩草」）[〃]いしくなぎ[〃]（「倭玉篇」）の名も生まれた。[〃]いしたたき[〃]は尾を上下して石をたたくから、[〃]いしくなぎ[〃]は尾を

揺り動かして石にふれるからである。

江戸時代になって、キセキレイ、セグロセキレイ、ハクセキレイ、イワミセキレイを区別し、命名するようになった。江戸時代前期の「本朝食鑑」では、ふつうの[〃]せきれい[〃]（セグロセキレイ）を説明した上で、一種、黄脊令^{せきれい}があるとしている。中期の「和漢三才図会」では、黄鵲^{きせきれい}、背黒鵲^{せぐろせきれい}、白鵲^{はく}の三種を区別し、「喚子鳥」では「黄せきれい 惣身あをくろく むねはら黄色 尾づつのうら又黄なり」「背黒せきれい 首、背くろく はら白し」「白せきれい 毛色せぐろに白き所多し」の記載がある。「鳥名便覧」には[〃]せきれい[〃]の蘭名クイッキタールトを記しているが Wikistart で「速やかな尾」の意味である。また「水谷禽譜」には[〃]せきれい[〃]のアイヌ語としてヲチウチルと記しているが、知里真志保によれば ociv - cit は交尾する鳥の意である（「分類アイヌ語辞典」）。これが本土から蝦夷地に、神話や[〃]とつぎをしへどり[〃]の名が伝わったからであらうか。また、アイヌ人がセキレイの行動をみて、本土の古代人と

同じような連想をしたのであろうか。』以上、書紀、鳥名辞典より。

山口大神宮の朱地に黄色の鶴鴒文は番の二羽が左右を向いて配されている。嘴を開けた一羽と閉じた一羽の組合せである。呵呷、始終、陽陰、天地、雄雌を表していると考えられる。伊邪那岐、伊邪那美二神の国生み神話に始まる祖神の正殿の一对の御扉の内帳の文様として用いた日本人の美的センスの高さには驚きを禁じえない。天照大御神は那岐大神の渙で生まれた女神で兄は月読命、弟は須佐之男命である。私たちを生かして頂く太陽の女神である。「豊葦原の中津国」の祖神なのだ。セキレイ文は万物の「み生れ」の宮のシンボルとして誠に意味深長ではある。古代人の透徹した自然界の観察によって「セキレイ」の特徴を極めて適確にとらえてデザイン化している。古人の神に対する畏敬の念と芸術性の高さにはただ感嘆するのみである。わが国先人のサイエンスとアートの融合性とレベル

ルの高さは世界に誇って良いだろう。

「防長風土注進案」に記録された内・外宮のご神宝の中でも農耕具は多く「豊葦原の瑞穂の国」の祭神としての伊勢両神の本来の姿が浮かび上がってくる。

生命を賭して戦国乱世を生き抜いた大内氏や毛利氏の神仏に対する真摯さは想像を超える。

残された歴史の事蹟は彼らの精神世界の所産でもある。今回の遷宮を期に大内文化もアジア世界に連なる壮大な文化であることが窺えた。

まとめ

一、大津郡三隅は伊勢神宮の御厨みくりやの地であった。御厨とは神領のことで地方豪族が、地元の特産品を神宮に献上して調庸の負担を免除された。大内氏以前の記録で、伊勢神宮と山口との経済関係は古くからあったのである。（山口大神宮誌以下同）

一、山口を開府した二十四代の大内弘世は初めて京都に上り、多くの神仏を山口へ勧請している。神道や

仏教さらに陰陽道の一流人との交流がなければ都の神仏勧請のことはなし得ないのである。しかも三条藤原氏の女を娶っている。

一、室町時代中期には吉田兼俱が吉田神道を確立した。以来、吉田家は神祇官の要職を占めて全国の神社を統轄した。二十五代大内義弘は吉田兼俱と親交があった。南北朝合体工作の大業を周旋し第百代後小松天皇誕生に力があつた。

一、二十六代大内盛見は応永二十八年（一四二一）十月十三日に將軍足利義持に従つて伊勢神宮を参拝している。盛見の母は三条藤原氏であつた。二十九代政弘の重臣陶弘護も伊勢参宮を行った。

一、失脚した足利義植を山口で七年間庇護した三十代大内義興は大挙上洛して義植を將軍職に復位させた。その功によつて官領代に任じられた。

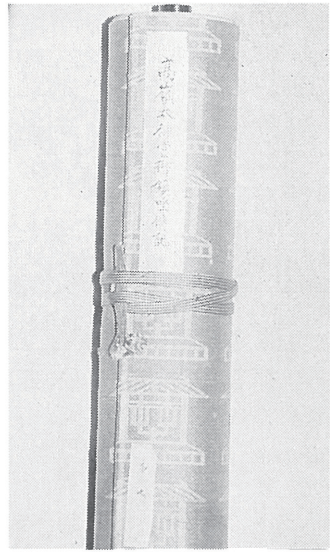
義興も伊勢崇敬の念が篤く、永正十一年（一五一四）三月七日に重臣弘中興兼をつかわして当時有職故実の大家であつた伊勢貞陸に伊勢参宮の作法慣例

を訊ねて答問をうけている。そして二年間の慎重な準備期間において行列や装備を整えて伊勢神宮を参拝したのであつた。

義興は後柏原天皇や將軍足利義植の親任が篤かつた。天皇は義興の帰国願いを二度までも留められ、在京は家臣団と共に十一年間にも及んだ。この間の京都文化の理解と吸収は大きいものがあつたであらう。

応仁の乱後の戦国乱世でわが国の秩序は麻のごとく乱れていたが、義興の在京の間は穏やかな平和な時代であつた。彼と一族郎党の実力の程が偲ばれる。その行動の源泉は、伊勢神宮を始めとする神仏の加護を願ひ、現世の平穏と太平の永続を祈念した彼のひたむきな精神世界にあつたといえよう。歴史の事蹟は「心の反映」の成果でもあるのだ。そして後柏原天皇の勅許を得て伊勢勧請が実現したのである。

山口県文書館専門研究員和田秀作氏によれば、山口大神宮造宮惣奉行弘中越後守武長は大内氏の行政官の長で警護大将でもあつた。將軍足利義植や京都衆



高嶺両太神宮
御鎮座傳記

との接渉担当の文化人であったという。神明勧請の一大慶事は大内家郎党の一致協力のみならず勧進に参加した庶民の力もまた大きいものがあつた。

「高嶺両太神宮御鎮座伝記」によれば行基や高野聖を思わす遊行僧十穀裕覚房が広く世間に勧進して庶民に奉加を募った記録がある。大内氏の伊勢勧請は上下あけての領国の大事業であつたことが分かるのである。

むすび

今回の遷宮を記念して「山口大神宮宝物展」が市歴

史民俗資料館で十月三日から十一月五日まで開催された。御鎮座伝記表装の「屋形文」や前述した「刺車文（小車文）」が公開展示された。さらに「太神宮御神宝織物類前積り絵図入り」には両秘紋の彩色説明図があつて、伊勢と山口の一致点がよく理解できた。また、ご正殿に納められていた御神宝と御装束も展示され、その上、前回の昭和三十五年に行われた式年遷宮の際に伊勢皇太神宮から拝領した御神宝の数々が四十年振りに特別公開された。これらは、人間国宝の工匠達が精魂を傾けて謹製されたものであつて、日本伝統工芸の精華である。歴世の御神宝や御装束は伊勢の神宮徴古館に膨大な常設展示がある、必見の日本文化の至宝である。

以上、平成の式年遷宮を祝い、伊勢神宮に秘められた北辰北斗の面影と山口開府大内氏の北辰妙見信仰の重層性を前号と今回の二篇とで考証した。秘紋「屋形文錦」や「刺車（小車）文錦」さらに「鶴鴿文錦」の



神宮徴古館 「神宮」伊勢神宮崇敬会より

意義と建築様式に秘められた陰陽五行思想について先学諸賢の著書を引用して紹介した。「高嶺両太神宮御鎮座伝記」は活字化されているが、古文書の解読が十分でなく、誤字も多いと聞く、創建に関わった人々の中には陰陽師や宿曜師とおもわれる寿星庵という名前もある。赤間神宮水野直房宮司によると分霊された神明御正躰を奉持して伊勢から山口へ下向した高向二頭太夫は伊勢御師おんし(御詔刀師という)の中では大きい師家であつたそうだ。アジア文化圏の思想を多方面から統合考究することに

よって、大内文化の実像がさらに蘇ると考える。今後の資料解明に期待したい。

山口大神宮式年遷宮年次表

勸請創建	永正十七年	(一五二〇)	大内義興
第一回	天文九年	(一五四〇)	大内義隆
第二回	永禄三年	(一五六〇)	毛利隆元
第三回	天正十四年	(一五八六)	毛利輝元
第四回	寛文九年	(一六六九)	毛利綱広
第五回	寛政三年	(一七九一)	毛利治親
第六回	文政二年	(一八〇五)	毛利斉熙
第七回	明治十二年	(一八七九)	
第八回	明治三十五年	(一九〇二)	
第九回	昭和三十五年	(一九六〇)	
第十回	平成十二年	(二〇〇〇)	
※文化八年	(一八一二)	式年祭	毛利斉熙
嘉永六年	(一八五三)	仮遷宮修理	毛利敬親

【引用書・参考文献】

吉野裕子著

「易と日本の祭祀」

人文書院

右同

「隠された神々」

人文書院

右同

「陰陽五行思想から見た日本の祭」

弘文堂

右同

「日本古代呪術」

大和書房

野尻抱影著

「星の神話・傳説集成」

恒星社版

吉田光邦著

「星の宗教」

淡交社

藤井 旭著

「チロの星空カレンダー」

ポプラ社

右同

「星座ガイドブック」

誠文堂新光社

金指正三著

「星占い星祭り」

青蛙房

佐野賢治編

「星の信仰」

北辰堂

柴田眼治編

「星伝説と大内氏」

山口日韓親善協会誌別冊

八田大一著

「山口開府大内弘世公夫人の謎」

蒙談二十八号

柴田眼治著

「山口大神宮創建の謎―北辰祭祀との

関係について―

蒙談三十号

広瀬秀雄著

「天文学史の試み」

誠文堂新光社

桜井邦朋著

「天体考古学入門」

講談社現代新書

福永光司著

「道教と日本文化」

日本書院

窪 徳忠著

「道教の神々」

平河出版社

村上修一著

「日本陰陽道史総説」

塙書房

長原芳郎著

「陰陽道」

雄鶏社

坂内龍雄著

「真言陀羅尼」

平河出版社

矢野道雄著

「密教占星術」

東京美術

錦織亮介著

「天部の仏像事典」

東京美術選書

石元泰博写真

「伊勢神宮」

岩波書店

稲垣榮三著

「伊勢神宮の建築とその象徴体系」

岩波書店

矢野憲一著

「伊勢神宮の衣食住」

東書選書

桜井勝之進著

「伊勢の大神の宮」

堀書店

森宏太郎著

「暮らしのなかの神々」

牧野出版

奈良国立博物館

第四十一回「正倉院展」

文化庁監修

「国宝 8 工芸品 Ⅲ」

菅原 浩

編著 「図説日本鳥名由来辞典」

柏書房

河野通毅編著 「大内村誌」

マツノ書店

柿澤亮三

萩原龍夫他著 「神々の聖地」

佼成出版社

「山口大神宮誌」

山口大神宮式年遷宮奉賛会

「伊勢神宮」

神宮司庁

山口大神宮蔵 「高嶺両太神宮御鎮座傳記」

「神宮」

伊勢神宮崇敬会

「日本全史」

講談社

「日本書紀」

岩波文庫

「万有百科大事典」

小学館

「防長風土注進案第二十」マツノ書店

「日本皇室事典」

新人物往来社

平瀬直樹著

「大内氏の妙見信仰と興隆寺二月会」

新改訳

「聖書」

日本聖書刊行会

山口県文書館研究紀要第一七号

高田真治訳注 「易経」

岩波書店

金谷匡人著

「山口県から見た北辰信仰の諸相」

近藤清石著

「大内氏実録」

マツノ書店

星の信仰 佐野賢治編 北辰堂

御蘭生翁甫著

「大内氏史研究(復刻版)」マツノ書店

平瀬直樹著

「興隆寺の天台密教と氏神

月刊

「北辰餘光」

マツノ書店

『妙見の変質』

月刊

「しにか」5

大修館書店

山口県史研究第2号¹⁹⁹⁴・3・山口県史編誌

「下松市史通史編」

司馬遼太郎著

「北斗の人」

角川文庫

編集下松市史編纂委員会 下松市発行

笹森順造著

「一刀流極意」

出雲大社社務所発行

宝城興仁著

「下松いろいろの歴史」

岡田印刷

「八代市史第二巻」八代市教育委員会

▼ 山口大神宮内宮正殿の千木・堅魚木

千木は内そぎで水平、堅魚木は今までより1本増えて10本となった。
千木の風抜き穴は3個。陽陰・天地の数の組み合わせ。



▲ 新造された山口大神宮の外宮

外宮の千木は外そぎ、垂直で堅魚木も今までより1本ふえて9本となった。
風抜き穴は前回の遺風にならない本宮とは異なる。